

厚生労働科学研究費補助金

地球規模保健課題解決推進のための行政施策に関する研究事業

国外の健康危機発生時に対応できる人材に必要なコンピテンシーの分析及び
人材を増強するための研修プログラムの開発のための研究
(19BA1001)

令和2年度 総括・分担研究報告書

研究代表者 大曲 貴夫

令和 3 (2021) 年 5 月

目 次

I. 総括研究報告

国外の健康危機発生時に対応できる人材に必要なコンピテンシーの分析及び人材を増強するための研修プログラムの開発のための研究

II. 分担研究報告

1. 国外の健康危機発生時に対応するための人材育成プログラム開発及び
オンラインGOARN Tier 1.5研修実施に関する研究

大曲 貴夫、森田 公一、押谷 仁、山本 太郎、古宮 伸洋、西條 政幸、
山岸 拓也

2. 日本の専門家のGOARN派遣を促進するための体制整備に関する研究

大曲 貴夫、森田 公一、押谷 仁、山本 太郎、古宮 伸洋、西條 政幸、
山岸 拓也

III. 研究成果の刊行に関する一覧表

I. 厚生労働科学研究費補助金
(地球規模保健課題解決推進のための行政施策に関する研究事業)
令和2年度総括研究報告書

国外の健康危機発生時に対応できる人材に必要なコンピテンシーの分析及び
人材を増強するための研修プログラムの開発のための研究(19BA1001)

研究代表者

国立国際医療研究センター 国際感染症センター 大曲 貴夫

研究分担者

国立大学法人長崎大学	熱帯医学研究所	森田 公一
国立大学法人東北大学	大学院医学系研究科微生物学分野	押谷 仁
国立大学法人長崎大学	熱帯医学研究所	山本 太郎
日本赤十字社和歌山医療センター	感染症内科	古宮 伸洋
国立感染症研究所	ウイルス第一部	西條 政幸
国立感染症研究所	感染症疫学センター	山岸 拓也

研究協力者

国立国際医療研究センター	国際感染症センター	李 祥任
国立国際医療研究センター	国際感染症センター	石金 正裕
国立国際医療研究センター	国際感染症センター	野本 英俊
国立国際医療研究センター	国際感染症センター	久保田 瞳
国立国際医療研究センター	国際医療協力局	法月 正太郎
国立大学法人東北大学	大学院医学系研究科微生物学分野	神垣 太郎
日本赤十字社和歌山医療センター	感染症内科	小林 謙一郎
国立感染症研究所	ウイルス第一部	前木 孝洋

研究要旨

2014年に西アフリカ諸国で発生したエボラウイルス病や、2019年に中国で発生し2020年現在、世界的パンデミックとなった新型コロナウイルス感染症(COVID-19)など、国際的に脅威となる感染症に対して、国際社会の枠組みによる緊急対応は非常に重要性を増している。世界的な感染症対策チームとしてGOARN(Global Outbreak Alert and Response Network)があり、これまで複数の日本人もGOARNに登録し派遣されているが、その数は限られている。

本研究班は、日本人専門家の国際感染症等対応人材の育成やGOARNの枠組みでのアウトブレイク対応派遣の推進を行い、国外の感染症危機時に派遣できる国内体制を構築することとした。なお、本年度は計画の2年目である。

国外の健康危機発生時に対応するための人材育成プログラム開発及びオンラインGOARN Tier 1.5研修実施に関する研究では、WHOや関係機関の協力を得て、2020年10月29日(木)～30日(金)の2日間のプログラムとして、世界で初めてオンライン(Zoom)形式で、IPCに特化したGOARNTier1.5ワークショップ研修を32名対象に実施した。受講者の評価結果より、回答者の100%にとって、本研修で学んだことは今後の派遣に役立つ内容であり、本研修への参加が今後の国際的アウトブレイク対応に従事する意欲や、GOARNやWPROのミッションへの応募意欲につながったことが確認された。

日本の専門家のGOARN派遣を促進するための体制整備に関する研究では、2019年度のGOARN Tier1.5研修参加者の中で同年にGOARN Japan ロスターに登録した34名に加えて、2020年10月に開催したオンラインGOARN Tier1.5研修日本人参加者30名から募集し、2021年3月時点で合計62名となった。GOARN派遣に役立つ情報提供として、GOARNの専門家派遣要請(5回)や、WHO地域事務局からの派遣募集(4回)、海外派遣経験者の帰国報告会(3回)や、専門家の能力強化に役立つ各種セミナー等に関する情報をEメールにて共有した。更に、WHO GOARNから本研究班研究メンバーの2名へ、GOARNにおける能力強化プログラムの広報となるCapacity Building and Training Programme Advocacy Videos(2本)への出演依頼を受け、収録に協力した。加えて、GOARN普及リーフレット「世界の国際感染症対策における日本からの技術支援の促進に向けて」を出版し、全国の指定感染症病院等約600施設に配布した。

本研究の2年目では、WHO GOARN、WPRO、本研究班の強い連携により、世界初のIPCに特化したオンラインTier1.5ワークショップ研修を実現し、GOARN Japan ロスターの登録者は、2021年3月時点で合計62名となった。今後のGOARN研修については、オンライン研修の場合、WPRO地域の他国とも合同で実施することも可能であり、これにより他国のGOARNパートナー機関や参加者とのネットワーク強化も促進できると考えられた。引き続き、グローバルな最新動向を捉えつつ、国内の専門家の派遣を取り巻く環境を考慮しながら、引き続き日本の専門家のGOARN派遣を促進するための支援体制の整備を進める必要がある。

A. 研究目的

2014年に西アフリカ諸国で発生したエボラウイルス病や、2019年に中国で発生し、現在も世界中で流行している新型コロナウイルス感染症(COVID-19)など、国際的に脅威となる感染症に対して、国際社会の枠組みによる緊急対応は非常に重要性を増している。

世界的な感染症対策チームとして GOARN (Global Outbreak Alert and Response Network: 地球規模感染症に対する警戒と対応ネットワーク)があり、これまで複数の日本人も GOARN に登録し派遣されているが、その数は限られている。GOARN 派遣には GOARN 研修の修了や国際的なアウトブレイク対応の経験が重視されているが、日本ではこれまで人材育成の機会が極めて限られていたことより、2019年度に GOARN 派遣に必要な能力の強化を目的とし、日本で10年ぶりとなる GOARN Tier1.5 研修を開催した。講師陣及び研修参加者から高い満足度と評価を得るとともに、更なる能力強化の機会を期待する声が多く聞かれた。研修終了後に日本と GOARN、WHO 講師陣との間でレビュー会議を開き、参加者の専門性の傾向を踏まえ、感染症予防管理 (Infection Prevention and Control; IPC) 分野に特化した研修プログラムの必要性が上がった。

本研究班では、①国外の健康危機発生時に対応するための人材育成プログラム開発及び オンライン GOARN Tier 1.5 研修実施に関する研究、②日本の専門家の GOARN 派遣を促進するための体制整備に関する研究を通じて、日本人専門家の国際感染症等対応人材の育成や GOARN の枠

組みでのアウトブレイク対応派遣の推進を行い、国外の感染症危機時に派遣できる国内体制を構築することとした。

B. 研究方法

①国外の健康危機発生時に対応するための人材育成プログラム開発及び オンライン GOARN Tier 1.5 研修実施に関する研究

本研究班関係者(研究代表、研究分担者、研究協力者、研究関係者)及び厚生労働省、WHO GOARN 関係者など多数の参画を得た。COVID-19 拡大を受け、2019年度対面で実施した GOARN training Tier1.5 研修を、本年度はオンライン (Zoom) で実施する計画となった。具体的には、2020年度初頭に本研究班で企画書を用意し、IPC に特化したオンライン GOARN training Tier 1.5 の方針に関する厚生労働省及び GOARN、WHO との会議を設け、検討・合意形成を進めた。GOARN には、Tier 1(Basic)、2 (Intermediate)、3(Advanced)という段階を踏んだ研修コースがあるが、GOARN 及び日本関係者間での検討を踏まえ、本研修は IPC に特化した GOARN Tier 1.5 研修に設定した。今年の Tier 1.5 研修は、派遣前必須のオンライン学習プログラムと、2日間のオンラインリアルタイム型ワークショップ研修、の二部で構成した。さらに今年度は、GOARN に派遣される専門家として現場で活動するために必要なコンピテンシーを具体的に測定し分析することを目的とし、コンピテンシーテストを開発した。具体的には、GOARN Online Capacity Building and Training Portal(*GOARN のオンライン学習プログ

ラムである)の各 e-Modules テーマの中で、将来派遣される際に役立つと思われる出題を 10 問抽出し、オリジナル問題から内容を一部改変した。GOARN のコンピテンシーに関する質問は多肢選択問題とし、他にテスト回答者の属性項目等も質問に含めた。回答対象者は、GOARN ワークショップ研修の受講者とし、2 日目の研修終了後に、オンライン形式で回答する方法とした。

②日本の専門家の GOARN 派遣を促進するための体制整備に関する研究

2019 年度に本研究班は、同年に開催した GOARN Tier1.5 研修の日本人受講者を対象に、GOARN で将来的に活躍できる候補者の人材プール“GOARN Japan ロスター”の構築に着手した。GOARN Japan ロスターは、本研究班事務局の国立国際医療研究センター(NCGM)の国際感染症センターが運営管理し、登録者へ GOARN 派遣要請情報、今後の GOARN の派遣に役立つ情報や関連するセミナーなどの情報をタイムリーに共有することを目的としたプラットフォームである。本年度は、本ロスター登録者を拡大するため、2020 年 10 月に実施したオンライン GOARN Tier1.5 研修の受講者のうち希望する者を本ロスターに登録する計画を立てた。本ロスター登録者の中から、GOARN 派遣要請や WHO Regional Office for Western Pacific (以下、WHO WPRO)) の専門家募集に対して応募する意思の連絡を受けた際には、本研究班事務局が申請の支援を行う体制の構築を図った。

さらに、GOARN JAPAN ロスター登録者への継続的な情報共有の一環として、GOARN や

WHO を通じて海外へ派遣された専門家の帰国後に、派遣のプロセスや現地での取り組み、直面した課題及び教訓を共有いただくことを目的にした「海外派遣者帰国報告会」を開催した。参加対象は、本ロスター登録者以外に、国際的な感染症のアウトブレイク対応に関心のある人である。帰国報告会の案内の送付先は、有力な派遣候補者が所属すると考えられる、国立感染症研究所の実地疫学専門家養成コース(FETP)、厚生労働省の危機管理専門家(IDES)、国際協力機構(JICA)が事務局を担当する国際緊急援助隊(JDR)、NCGM(センター病院、国際医療協力局、グローバルヘルス人材教育センター)等のネットワーク等、とした。また、国際保健及び感染症分野の各種メーリングリスト経由でも適宜案内を投稿する方法とした。また、昨年度に実施した GOARN 派遣を促進するための因子を明らかにする研究の結果より、GOARN 派遣の候補者となる専門家の多くは、日本国内の医療機関や研究機関、行政機関に所属しているため、国内での業務とどのように折り合いをつけて GOARN 派遣に参加するかが、今後の検討課題となっていた。つまり、日本人専門家の GOARN 派遣促進のためには、専門家個人だけでなく、所属する組織からの理解を得られるための対応の必要性が考えられた。よって、今年度は日本国内の専門家個人だけでなく、より多くの組織へ GOARN への認知を広め GOARN 派遣の理解が促進されるよう、GOARN の普及活動を実施した。具体的には、各種関連学会での演題発表及びシンポジウムの企画、学術誌への論文の投稿、GOARN 普及リーフレットの作成

やNCGMのホームページによる情報掲載を通じて、日本からのGOARN派遣の意義及び本研究班の取り組みを広く発信した。

C. 研究結果

①国外の健康危機発生時に対応するための人材育成プログラム開発及びオンラインGOARN Tier 1.5研修実施に関する研究

WHOや関係機関の協力を得て、2020年10月29日(木)～30日(金)の2日間のプログラムとして、オンライン(Zoom)形式のGOARNTier1.5ワークショップ研修を実施した。研修参加者は事前に31名が登録されていたが、国内のCOVID-19対応のため2名が欠席となり、オブザーバー参加を予定していた3名が参加者へ昇格し、最終的に32名が参加した。応募時の回答(n=32名)によると、研修参加者の職業は、医師23名(72%)、看護師5名(16%)、学生2名(1%)、その他2名(1%)であった。所属先は、医療機関19名(59%)、大学5名(15%)、省庁4名(13%)、その他4名(13%)であった。所属先がGOARNパートナー機関であるか否かについては、GOARNパートナー機関である17名(53.1%)、GOARNパートナー機関でない15名(46.9%)であった。海外におけるアウトブレイク対応や保健医療活動に参加した経験は、あり20名(62%)、なし6名(19%)、記載なし6名(19%)であった。日本におけるアウトブレイク対応や保健医療活動に従事した経験は、あり24名(75%)、なし2名(6%)、記載なし6名(19%)であった。今回、初めてオンラインでリアルタイム型ワークショップ研修を開催したことで、

海外に駐在する日本人専門家も参加可能となり、日本を含む9か国から参加があった。その内訳は、日本(27名)、アメリカ(1名)、カナダ(1名)、ミャンマー(1名)、アフガニスタン(1名)、イギリス(1名)であった。WHO、GOARNのオンラインサーベイを使用し、ワークショップ研修最終日に参加者より回答(n=31)を得た。研修評価については、1(very low)～5(very high)の5段階中、5(51.6%)、4(45.2%)、3(3.2%)との回答が得られた。今後の派遣のために最も役に立った研修項目(最大2項目までの選択式)については、Adapting interventions to the community (considerations for control measures)(61.3%)、Stories from former deployees (all sessions)(51.6%)、Designing field-appropriate IPC interventions(48.4%)の順に高かった。本研修の内容は適切であり興味深かったかについては、「非常にそう思う」(58.1%)「そう思う」(41.9%)が全回答を占めた。過去のGOARN派遣経験者からの課題と教訓の共有から、派遣の実際、利点、及び課題についての理解を深めることができたかについては、「非常にそう思う」(80.6%)「そう思う」(19.4%)、であった。本研修で学んだことは今後の派遣に役立つかについては、「非常にそう思う」(77.4%)「そう思う」(22.6%)、であった。本研修で学んだことは今後の日本での活動に役立つかは、「非常にそう思う」(48.4%)「そう思う」(35.5%)で83.9%を占めた。本研修への参加が今後の国際的なアウトブレイク対応に従事する意欲につながったかについては、「非常にそう思う」(77.4%)、「そ

う思う」(22.6%)、であった。本研修への参加が、GOARN や WPRO のミッションの派遣への応募意欲につながったかについては、「非常にそう思う」(74.2%)、「そう思う」(25.8%)、であった。オンラインによる研修は国際的なアウトブレイクのオンラインでの対応について学ぶのに役立ったかについては、「非常にそう思う」(71.0%)、「そう思う」(29.0%)、であった。本研修を COVID-19 対策にあたる同僚に勧めたいかについては、「非常にそう思う」(67.7%)、「そう思う」(32.3%)、であった。どの研修内容が最も興味深く役に立ったかを問う設問(記述式)では、「コミュニティで IPC の介入を行う方法に関するグループワークが良かった」、「既成概念にとらわれずに考えることが重要であると学んだ」、「日本人過去派遣者による経験共有のおかげで、GOARN の実際の派遣のイメージができた」、「チャットボックス(講師、他参加者とメッセージ交換できる Zoom 機能)が良かった」、「WHO 講師によるグループのエンパワーメントとファシリテーションのスキルから多くのことを学んだ」等という記述があった。研修の講師陣に対する満足度については、1(とても低い)から 5(とても高い)のスコアをつける記述回答で、回答の大半が 5 もしくは 4 であったが、今後の本研修の改善案については、「参加者に国際色があると良い」、「グループワーク (Zoom におけるブレイクセッション)の際、他の参加者と直接話せないのが少しストレスがあった」、「オンライン研修において集中力を維持するのが大変だった」という意見があった。

GOARN で専門家として働くためのコンピテンシーテストは、ワークショップ研修の全参加者(n=32名)が、本テストに回答した。スコアの中央値は10点満点中8点であった。スコアの範囲は、最低値5点～最高値10点であった。正解率は、eModule 名別に”Well-being”が最も高く(100%)、”多職種のチームワークでの働き方”の質問の一つが最も低かった(43.8%)。後者は、IPC 専門家として GOARN に派遣された場合の登場人物の責任の範囲を問う内容であった。回答者の背景別スコアは、2019年のGOARN ワークショップ研修の受講歴がある人の平均スコア(8.2)が、今回が本研修の初参加者である人の平均スコア(7.7)よりも高かった。WHO による国外ミッションの経験有無別のスコアでは、経験あり(8.5)が、経験なし(7.3)に比べて高かった。本ワークショップ研修前に受講が必須とされた6つのe-Module の達成度による得点比較は、全て終わらせた人(7.7)のスコアが、いくつか終わらせた人(7.3)より高かった。また、何も受講できていなかった人が1名おり、その平均スコアが(8)となったため、全体で最も高い値となった。

②日本の専門家の GOARN 派遣を促進するための体制整備に関する研究

2020年10月に開催したオンラインGOARN Tier1.5研修の参加者は32名おり、そのうち外国人留学生を除くと30名が日本人であった。この日本人受講者をGOARN Japan ロスター候補とし、GOARN Japan ロスターへの登録を任意で募った。その結果、30名全員から回答が得られた。その

内訳は、GOARN JAPAN ロスター登録の希望については、29 名が「あり」で、1 名は「なし」であった。29 名のうち 3 名は 2019 年度 GOARN 研修参加者であり、既に GOARN Japan ロスターへ登録されていたため、26 名が今年度新たに GOARN Japan ロスターへ登録された。本年度は、加えて、2019 年の GOARN 研修参加者で 2019 年度にロスター登録をしていなかったが今年度に希望した 1 名、GOARN 研修の参加者ではないが今年 GOARN へ派遣された専門家でロスター登録をした 1 名が登録された。こうして GOARN Japan ロスター登録者数は、2019 年度の GOARN Tier1.5 研修参加者の中で同年に登録した 34 名に加えて、2021 年 3 月時点で合計 62 名となった。

なお、今年の研修参加者の中でロスター登録を希望した専門家の所属先内訳は、GOARN パートナー機関である者が 29 名 (46.8%)、GOARN パートナー機関ではない者が 33 名 (53.2%) であった。

GOARN Japan ロスターの登録者向けに GOARN 派遣に役立つ情報提供として、GOARN の専門家派遣要請(5 回)や、WHO 地域事務局からの派遣募集(4 回)、専門家の能力強化に役立つ各種セミナー等に関する情報を E メールにて共有した。

さらに、ロスター登録者へ共有した GOARN や WHO による専門家派遣要請情報に対し 7 名が応募の関心を示し、以下のように申請の支援や調整を行った。なお、7 名中、4 名は所属先が GOARN パートナー機関ではない専門家であった。具体的には、2020 年 8 月の WHO WPRO から出された新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) 対策における臨床管理専門家の募集については、

2019 年の GOARN 研修参加を機に GOARN JAPAN ロスターへ登録した小林 謙一郎医師が応募し、派遣を実現させた。同医師がパプアニューギニアに派遣されている間、現地における活動情報を聞き取るためオンラインミーティングを開催し、帰国後は後述する帰国報告会にて経験を発表いただく講師として依頼し、了承を得た。2020 年 11 月には、SEARO からのバングラデシュにおける COVID-19 対策臨床管理専門家の募集について、2020 年 GOARN 研修に参加し、本ロスターに登録した 1 名より、応募する旨連絡を受けたが、派遣には至らなかった。2021 年 2 月送付の WPRO から出された COVID-19 対策臨床管理専門家の派遣募集については、2020 年 GOARN 研修に参加し、本ロスターに登録した 1 名より、応募する旨連絡を受けた。GOARN 研究班事務局が、申請者へ応募のための CV 及びカバーレターの書き方等について適宜助言を行ったが、派遣には至らなかった。2021 年 2 月に SEARO から出された東ティモールにおける COVID-19 対策への GOARN 要請については、2020 年 GOARN 研修に参加し、本ロスターに登録した 1 名より、応募する旨連絡を受けた。厚生労働省結核感染症課をフォーカルポイントとして申請登録をしたが、COVID-19 下における国際線本数の制限(月に 1 本程度の運行)により職場で調整した日程に嵌らず、申請を断念した。2021 年 3 月に出された麻疹対策への GOARN 要請については、2020 年 GOARN 研修に参加し本ロスターに登録した 3 名より、応募する旨、連絡を受けた。2 名は、今回のフォーカルポイントを、長崎大学熱帯医学研究所(1 名)、国

立国際医療研究センター(1名)、として申請を行ったが、GOARN パートナー機関の所属ではなかった 1 名は厚生労働省結核感染症課枠で検討中である。(2021 年 3 月 31 日時点)

また、次のように海外派遣経験者の帰国報告会を 3 回実施した。

・GOARN 派遣帰国報告会第 1 回オンラインセミナー

報告会日時：令和 2 年 6 月 11 日

報告会参加者数：約 50 名

スピーカー：法月 正太郎医師

国立国際医療研究センター(NCGM) 国際医療協力局

派遣先：WHO フィリピン国事務所 (COVID-19 対策、IPC)

・GOARN 派遣帰国報告会第 2 回オンラインセミナー

報告会日時：令和 2 年 7 月 8 日

報告会参加者数：57 名

スピーカー：神垣 太郎先生

東北大学大学院医学系研究科微生物学分野

派遣先：WHO WPRO (COVID-19 対策、疫学)

・第 3 回オンラインセミナーWHO WPRO 派遣帰国報告会

報告会日時：令和 3 年 1 月 12 日

報告会参加者：48 名

スピーカー：小林 謙一郎医師

和歌山医療センター感染症内科

派遣先：パプアニューギニア (COVID-19 対策、臨床管理専門家)

今年度は、GOARN と本研究班の取り組みを

普及するために、学会発表及び論文投稿、学会におけるシンポジムの企画・開催等を行った。(詳細は本報告書の「研究発表」項を参照。)

COVID-19 拡大の影響を受けつつも、当研究班が 2 年連続で GOARN 研修を実現し成功を修めたことが GOARN や WHO WPRO より称賛され、本研究班研究協力者の李祥任(NCGM 国際感染症センター)が WHO WPRO 主催の GOARN Partners Regional Meeting にスピーカーとして招待を受けた。本会には WPRO 地域の加盟国の GOARN パートナー機関関係者を中心に 100 名以上が参加した。

さらに李は、本会の Panel Discussion のパネリストとしても招待を受け、GOARN Steering committee 議長や、WHO にある GOARN の運営支援チームの取りまとめ担当者らと共に、GOARN を円滑に展開するための regionalization の強化の必要性について、議論を行った。

更に、WHO GOARN から本研究班研究メンバーの 2 名へ、GOARN における能力強化プログラムの広報となる Capacity Building and Training Programme Advocacy Videos への以下の出演依頼を受け、収録に協力した。

・Video1: GOARN の能力開発および研修プログラムに対する参加者からの評価

出演者：NCGM 国際医療協力局 法月 正太郎先生 (2019 年の GOARN 研修への参加を経て 2020 年に COVID-19 対策で WHO フィリピン国事務所へ派遣)

・Video2: GOARN の能力開発および研修プログラムに対する組織からの評価

出演者：NCGM 国際感染症センター

李 祥任研究員

加えて、GOARN 普及リーフレット「世界の国際感染症対策における日本からの技術支援の促進に向けて」を出版し、全国の指定感染症病院等約 600 施設に配布した。

D. 考察

①国外の健康危機発生時に対応するための人材育成プログラム開発及び オンライン GOARN Tier 1.5 研修実施に関する研究

今年の GOARN 研修は、COVID-19 による渡航制限の影響や密集を避けるために、開催が危ぶまれていた。しかし、この逆境を乗り越え、GOARN、WHO(本部、WPRO)、本研究班の連携が強化され、世界初の IPC に特化したオンライン Tier1.5 ワークショップ研修を実現することができた。WHO・GOARN による COVID-19 への取り組みに関する最新情報から GOARN 派遣現場における IPC の優先課題の理解、コミュニティで現場に即した IPC を効果的に実施する方法、日本での IPC の経験を派遣現場でどのように活かせるか、といった実務に役立つ内容が盛り込まれた研修となった。こうした内容について、経験豊富な WHO 講師陣や日本からの GOARN 派遣経験者を交えて非常にインタラクティブなワークショップで学べたことは、研修参加者にとって貴重な機会を提供できたと考える。終了時に実施した研修参加者のサーベイ結果によると、研修参加者からの研修評価は非常に高く、各自の研修参加目標も概ね達成された。また回答者の 100%にとって、本研修で学んだことは今後の派遣

に役立つ内容であり、本研修への参加が今後の国際的アウトブレイク対応に従事する意欲や、GOARN や WPRO のミッションへの応募意欲につながったことが確認された。今後の派遣のために最も役に立った研修項目(選択式)について、回答数の多かった上位 3 項目は、Adapting interventions to the community (considerations for control measures) (61.3%)、Stories from former deployees (all sessions) (51.6%)、Designing field-appropriate IPC interventions (48.4%)であった。

次に、最も興味深く役に立った研修内容を問う設問(記述式)では、派遣先の現地におけるコミュニティで IPC の介入を行う方法についてのグループワークに前向きな評価コメントが多く聞かれた。理由の一つとしては、研修参加者が、派遣先の困難な状況で、いかに IPC の技術支援をできるかという GOARN の実際の派遣イメージを持つことができたためと考えられる。加えて、プログラムを通してオンラインセッションが続く中、本グループワークは各グループに割り当てられた WHO 講師陣や他の研修参加者と双方向にコミュニケーションがとれるセッションであった点も好印象であったと考えられる。過去派遣者からの経験共有の講義についても高い評価コメントが多く寄せられた。これは研修参加者がこれまで派遣の実際について知見を得られる機会が限られていたことより、派遣経験者から、GOARN 派遣に至った経緯から申請登録、派遣前準備、現地での活動や困難な状況への対処、自身の well-being(心身の健康状態の確

保)、帰国までの一連を学べたことが興味深く、役に立ったものと考えられる。

職業別参加者の割合については、医師(72%)は昨年と同等であったが、看護師(16%)については昨年の2%に比べて増加した。一方、昨年12%の割合を有した研究者は、今回の研修では1%に満たなかった。所属先で高い割合を占めた医療機関(59%)については、昨年の50%より増加した。これは、今回の研修がIPCに特化したものであり、臨床現場でIPCに携わる専門家の参加が増えたためと考えられる。今回の研修参加者の約75%は、日本におけるアウトブレイク対応や保健医療活動に従事した経験のある専門家であった。しかし、海外におけるこうした活動への経験は約60%に限られていたこともあり、本研修における教授法を通じて、多くの研修参加者が実際の派遣や直面する課題と解決策等を具体的にイメージする助けになったと考えられる。

今回初めて実施したGOARNで専門家として働くためのコンピテンシーテストの結果について、4つのテーマ別には、総合的に平均スコアは高かった。しかし、多職種チームの中で従事する場面設定において、自分の責任範囲に関する設問のスコアが最も低かった。派遣を実際に経験しないと、現場の状況が変化する中で自分の立場を具体的に想像し難いと想像されるが、専門家としての責任範囲の理解は重要である。よって、今後のGOARN研修の機会に、このコンピテンシーを高めるために役立つ内容を盛り込むことが望ましいと考える。

今年度は、COVID-19の世界的拡大を受けてやむを得ずオンラインでの開催となったものの成功を修めた研修となった。しかし、研修のオンライン化には利点と欠点の両者があると考えられる。参加者から評価された点は、研修会場まで移動する時間を省くことができた点、従事している業務や家事等との調整がしやすかった点等であった。COVID-19等の対応で多忙を極める研修参加者にとって、オンライン開催は参加しやすいものであったと考えられる。実際に日本全国各地や海外からの参加者がいたことも、この利点を裏付けるものである。

研修運営側にとっては、オンライン化したことにより、対面形式による研修に起因するCOVID-19感染のリスクを払拭し、海外から参加したWHO・GOARN講師陣と共に日本の専門家のためのGOARN研修を昨年に続き実現できたことが最大の利点となった。

一方で、研修参加者からのネガティブな意見は、他の参加者等とのネットワーキングができなかった点やグループワークの難しさ、参加者の機材でインターネットの接続不良が起こった点等であった。これらの点については、オンライン研修の場合、研修参加者同士がマンツーマンで会話ができる環境がないため、研修参加者がそのように感じた可能性がある。また、グループワークについては、対面の研修よりもモニター経由で発言のタイミングをつかむ難しさがあると感じた参加者がいたと考えられる。運営の立場では、研修中に参加者のビデオがオフにされた際の受講状況の確認が困難であった点が、

今後の課題であるといえる。

今回の研修終了後に、WHO、GOARN の講師陣と本研究メンバーで研修のレビューを実施した。オンライン研修であったにも関わらず、講師陣と研修参加者の間で円滑に対話でき、さらに GOARN 派遣経験者と研修参加者との間に一定のコネクションを築くことができた点が特に評価された。WHO、GOARN からは、研修参加者の熱意溢れる受講姿勢に対し高い評価を受けるとともに、本研修が今後の GOARN 派遣につながることを期待された。同時に、GOARN 研修ホスト国として日本は非常に優れており、是非今後も共同作業に取り組みたいとの前向きなコメントも頂いた。

今後の GOARN 研修については、オンライン研修の場合、WPRO 地域の他国とも合同で実施することも可能であると考ええる。これにより本格的な国際研修となり、他国の GOARN パートナー機関や参加者とのネットワーク強化も促進できる。さらに、COVID-19 の感染が落ち着けば、実際の GOARN 派遣現場のように再現された屋外での演習を含めた GOARNTier2.0 研修を是非、日本で開催したいと考える。

②日本の専門家の GOARN 派遣を促進するための体制整備に関する研究

今年度開催した GOARN 研修の参加者に対する案内等を通じ、今年度は新たに 28 名が GOARN Japan ロスターに登録され、2021 年 3 月時点で本ロスター数は合計 62 名と拡大した。

さらに、こうした GOARN Japan ロスターの登録者向けに GOARN 派遣に役立つ情報

提供として、GOARN や WHO 地域事務局からの派遣募集や、専門家の能力強化に役立つ各種セミナー等に関する情報を共有したことで、GOARN や WHO による専門家派遣要請情報に対し 7 名が応募し、2021 年 4 月までに 1 名が WHO WPRO から出された COVID-19 対策における臨床管理専門家としてプアニューギニアに派遣された。

こうした取り組みにより、日本で開催する GOARN 研修の参加者後にロスターに登録、ロスターのプラットフォームからタイムリーな派遣情報を得て応募、海外の国際感染症対策のために派遣、帰国後は帰国報告会で他のロスター登録者へタイムリーに経験や現地で実施されている対策の最新情報を共有、という専門家の派遣促進のための好循環を作りあげることができたと考える。

なお、今年の研修参加者の中でロスター登録を希望した専門家の所属先内訳は、GOARN パートナー機ではない者の割合が半数を超えていた。よって、今後のこうした所属先の専門家が GOARN の要請に申請をする場合に直面する課題の整理や必要な支援のあり方を継続して検討する必要がある。

今年度は、さらに GOARN 普及活動も展開した。日本では、GOARN 派遣にある程度理解を有している GOARN パートナー機関数は 17 機関であるが、全国の指定感染症機関数と比較すると決して多い数とはいえない、と考えられた。よって、今年度に GOARN 普及活動を全国レベルで多角的に行ったことで、GOARN の派遣要請に対し関心を示す専門家の層を拓げるためや、所属先の組織からも GOARN の理解を得られ

るための支援環境作りを推進できたと考えられる。

こうした普及活動の継続と共に、今後は日本の GOARN パートナー機関の間でネットワーク強化を図ることにより、最新の GOARN 情報や研究班の取り組みを紹介し、多くの機関から GOARN への専門家派遣に対する関心をさらに高める取り組みも必要と考える。

さらに 12 月に開催された WHO WPRO 主催の GOARN Partners Regional Meeting では、GOARN パートナー機関としての取り組みを代表する形で、本研究班から 2 年間の GOARN 研修の発展と成果を発表する機会となり、日本のこうした取り組みは他国の GOARN パートナー機関から高い注目を集めた。また、本会の冒頭で、葛西健 WHO WPRO 事務局長より、GOARN パートナー機関を代表する活動を行う本研修班に対する感謝のお言葉をいただいた。

また、パネルディスカッションで本研究班研究メンバーが登壇し、GOARN 研修による専門家の能力強化の機会や、GOARN 枠ではないが WHO の国事務所からの要請で感染症対策のために専門家として派遣される機会は、将来的に GOARN 枠で派遣される専門家の能力強化だけでなく円滑な GOARN の運営のためにも役立つことの意義を発表した。このメッセージを、WHO WPRO や GOARN の世界的中核メンバーへ届ける絶好の機会になったと考える。

さらに、この GOARN Partners Regional Meeting に参加したことで、オーストラリア政府が GOARN に派遣されるオーストラリアの専門家の派遣中の給与を含めた人件費に対する支援を通じて、国レベルで

GOARN への人材派遣を支援している情報も得られた。よって、日本の専門家の GOARN 派遣を促進するための支援体制の整備のために、今後、こうした諸外国における GOARN 派遣を促進する支援体制の情報をさらに収集し、分析する予定である。

E. 結論

本研究の 2 年目では、GOARN、WHO(本部、WPRO)、本研究班の強い連携により、世界初の IPC に特化したオンライン Tier1.5 ワークショップ研修を実現できた。32 名の専門家の能力が強化され、研修参加者から非常に高い研修評価を得られた。また、研修参加者を対象にした GOARN で専門家として働くためのコンピテンシーテストを開発し、分析結果から今後の能力開発に役立つ情報も得られた。今後の GOARN 研修については、オンライン研修の場合、WPRO 地域の他国とも合同で実施することも可能であり、これにより他国の GOARN パートナー機関や参加者とのネットワーク強化も促進できる。

さらに、本研究活動を通じ、GOARN 派遣に関心を示す日本の専門家の GOARN 研修の参加から、その後のロスター登録、派遣の申請支援、採用された専門家の派遣先からの帰国後に至り、専門家の派遣促進のための好循環を作りあげることができたと考える。

これまでの 2 年間における当研究班の積極的な取り組みにより、GOARN の運営中核メンバーや WHO WPRO 地域の加盟国の GOARN パートナー機関とも、情報交換やネットワーク強化を強化することができた。引き続き、グローバルな最新動向を捉えつつ、国内の専門家の派遣を取り巻く環

境を考慮しながら、引き続き日本の専門家の GOARN 派遣を促進するための支援体制の整備を進める必要がある。

F. 健康危険情報

該当なし

G. 研究発表

1. 論文発表

Fujita M, Umeda T, Fujita N, Nishioka T, Iwamoto A, Ohmagari N, Ishikane M, Akashi H, Kokudo Norihiro. Japanese WHO Collaborating Centres (WHO CCs) fight against COVID-19. *Glob Health Med.* 2021 Apr 30;3(2):115-118.

Hidetoshi Nomoto, Masahiro Ishikane, Sangnim Lee, Nobuhiro Komiya, Takahiro Maeki, Tamano Matsui, Kouichi Morita, Hitoshi Oshitani, Masayuki Saijo, Takuya Yamagishi, Taro Yamamoto, and Norio Ohmagari. Facilitating the Deployment of Japanese Human Resources for Global Outbreaks of Emerging and Re-emerging Infectious diseases: A Cross-Sectional Study (投稿済み。査読対応中)

国際感染症の発生時の日本による WHO の国際的緊急技術支援ミッションへの人的貢献を促進するための体制整備に向けた一考察 (投稿準備中)

2. 学会発表

李 祥任, 石金 正裕, 野本 英俊, Sharon Salmon, Renee Christensen, 大

曲 貴夫. 国外の健康危機発生時に対応するための人材育成プログラム開発の進捗と今後の課題 -WHO との共同による GOARN 人材育成研修の実施と評価-, グローバルヘルス合同大会 2020 大阪, 11 月 1-3 日, 2020. WEB 開催.

第 69 回日本感染症学会東日本地方会学術集会. シンポジウム「国際感染症対策における多様なキャリアパスと派遣を促進するための体制整備のあり方」2020 年 10 月 23 日.

座長: 大曲 貴夫、古宮 伸洋

発表者: 石金正裕、井手 一彦、古宮 伸洋、山岸 拓也

李 祥任、法月 正太郎、神垣 太郎、太田 夢香、石金 正裕、大曲 貴夫. 国際感染症の発生時の日本による WHO の国際的緊急技術支援ミッションへの人的貢献を促進するための体制整備に向けた一考察 -WHO GOARN と日本の JDR の特徴と派遣制度の比較-. グローバルヘルス合同大会 2020 大阪. 2020 年 11 月 1-3 日.

野本 英俊、石金 正裕、李 祥任、大曲 貴夫. 日本からの GOARN 派遣を促進する因子を明らかにするためのアンケート調査. グローバルヘルス合同大会 2020 大阪. 2020 年 11 月 1-3 日.

GOARN Partners Regional Meeting. 4th December, 2020. (online)

(1) Invited speaker

Sangnim Lee. "Orientation to the International Outbreak Response with

GOARN and WHO workshop on Infection Prevention and Control -Through collaboration between GOARN, WHO and Japan- “ in the session of GOARN partner activities.

(2) Invited speaker

Sangnim Lee. In the Panel Discussion “GOARN regionalization” .

H. 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む）

該当なし

I. 厚生労働科学研究費補助金
(地球規模保健課題解決推進のための行政施策に関する研究事業)
令和2年度 分担研究報告書

国外の健康危機発生時に対応できる人材に必要なコンピテンシーの分析及び
人材を増強するための研修プログラムの開発のための研究

1. 国外の健康危機発生時に対応するための人材育成プログラム開発及び オンライン
GOARN Tier 1.5 研修実施に関する研究

研究代表者

国立国際医療研究センター 国際感染症センター 大曲 貴夫

研究分担者

国立大学法人長崎大学 熱帯医学研究所 森田 公一

国立大学法人東北大学 大学院医学系研究科微生物学分野 押谷 仁

国立大学法人長崎大学 熱帯医学研究所 山本 太郎

日本赤十字社和歌山医療センター 感染症内科 古宮 伸洋

国立感染症研究所 ウイルス第一部 西條 政幸

国立感染症研究所 感染症疫学センター 山岸 拓也

研究協力者

国立国際医療研究センター 国際感染症センター 李 祥任

国立国際医療研究センター 国際感染症センター 石金 正裕

国立国際医療研究センター 国際感染症センター 野本 英俊

国立国際医療研究センター 国際感染症センター 久保田 瞳

国立感染症研究所 ウイルス第一部 前木 孝洋

研究要旨

エボラウイルス病や、世界的パンデミックとなった現在の新型コロナウイルス感染症（COVID-19）など、国際的な脅威となる感染症に対する国際社会の連携した取り組みの需要は高まっている。世界屈指の感染症対策チームを迅速に現場へ派遣し、技術支援を行うGOARN（Global Outbreak Alert and Response Network）へ、日本から専門家をより多く派遣し貢献するためには、GOARN派遣に必要な専門家の能力の強化が継続的に必要である。

2020年度のGOARN研修は、COVID-19による影響を受け開催が危ぶまれていたが、GOARN、WHO（本部、WPRO）、本研究班の強い連携により、世界初のIPCに特化したオンラインTier1.5ワークショップ研修を2020年10月に実現できた。32名の専門家の能力が強化され、研修参加者から非常に高い研修評価を得られた。また、研修参加者を対象にしたGOARNで専門家として働くためのコンピテンシーテストを開発し、分析結果から今後の能力開発に役立つ情報も得られた。

A. 研究目的

GOARN（Global Outbreak Alert and Response Network）は、World Health Organization（WHO；世界保健機関）やパートナー機関により2000年に設立された国際的なテクニカルネットワークである。WHO本部にあるGOARN operation support teamが調整役を務め、エボラ出血熱や新型コロナウイルス感染症（COVID-19）等の国際感染症の危機発生時に世界屈指の感染症対策チームを迅速に現場へ派遣し、技術支援を行う。

GOARN派遣にはGOARN研修の修了や国際的なアウトブレイク対応の経験が重視されているが、日本ではこれまで人材育成の機会が極めて限られていたことより、2019年度にGOARN派遣に必要な能力の強化を目的とし、日本で10年ぶりとなるGOARN Tier1.5研修を開催した。講師陣及び研修参加者から高い満足度と評価を得るとともに、更なる能力強化の機会を期待する声が多く聞かれた。研修終了後に日本とGOARN、WHO講師陣との間でレビュー会議を開き、参加者の専門性の傾向を踏まえ、感染症予防管理（Infection Prevention and Control；IPC）分野に特化した研修プログラムの必要性が上がった。

更に、昨今のCOVID-19の拡大から、GOARN

の迅速な技術サポートに対する需要は益々高まっており、世界における人道的支援にとどまらず日本への波及を防止する目的においても、国際感染症の危機対応に派遣できる人材を育成する研修プログラムの開発を継続する必要がある。そこで、今年度はIPC分野に特化したGOARN Tier 1.5研修を開発・開催する運びとなった。

B. 研究方法

(1) 研修プログラム開発体制及び開発プロセス

本プログラム開発には、本研究班関係者及び厚生労働省、WHO（本部、WHO Regional Office for Western Pacific

（以下、WHO WPRO））、GOARN関係者等多数の参画を得た。COVID-19拡大を受け、昨年度対面で実施したGOARN training Tier1.5研修を、本年度はオンライン（Zoom）で実施する計画となった。

具体的には、2020年度初頭に本研究班で企画書を用意し、IPCに特化したオンラインGOARN training Tier 1.5の方針に関する厚生労働省及びGOARN、WHOとの会議を設け、検討・合意形成を進めた。

その後のプログラム開発は、WHO本部のGOARN研修担当者（Lead for Capacity Building & Training）及びWHO WPROの

GOARN担当者と国立国際医療研究センター（以下、NCGM）の本研究班メンバー間で密な連絡・調整により詳細計画と開催準備を進めた。NCGMから適宜、厚生労働省及び研究班関係者と調整した。研修項目には、本研究班から次の項目を盛り込むことをGOARN、WHO講師陣に提案した（GOARNの派遣に関する基礎知識や、WHO、GOARNによるCOVID-19への取り組みに関する最新情報。IPC専門家として派遣されるための能力を強化するために、GOARN派遣先におけるIPCの優先課題や、日本におけるIPCの経験を派遣現場にどのように活かすか、現場のコミュニティへの効果的なIPC介入の方法、現場に即したIPC介入の計画立案等）。また、IPC分野における経験や専門性の観点から、研修参加者や、過去のGOARN派遣経験者の発表者を選定する方針とした。こうした本研究班からの提案はGOARN、WHO WPRO関係者から柔軟に受け入れられ、プログラムの開発に至った。

(2) GOARN Tier 1.5 ワークショップ研修の目的

GOARN、WHO WPRO と調整し、本研修の目的を以下のように設定した。

国際的なアウトブレイクへの対応にはフィールドレベルでのIPCが不可欠な要素であり、IPCの強化に従事する専門家の役割は大きい。IPC分野に特化した本研修により、GOARNとWHOの多職種の国際ミッションに参加する上で必要とされるプロセスや、現場で想定される課題、実態を理解するとともに、GOARNミッションで必要とされるIPC専門家としてのスキルと知識、柔軟性を習得する。また、ワークショップを通してアウトブレイクへのアプローチの仕方を習得する。

(3) 研修プログラムの構成

GOARN には、Tier 1(Basic)、2 (Intermediate)、3(Advanced)という段階を踏んだ研修コースがあるが、GOARN及び日本関係者間での検討を踏まえ、今回はGOARN Tier 1.5研修のIPCに特化したコースを立案した。今年のTier 1.5研修は、派遣前必須のオンライン学習プログラムと、

2日間のオンラインリアルタイム型ワークショップ研修、の二部で構成した。リアルタイム型ワークショップ研修開催日迄に、各参加者が派遣前必須オンライン学習プログラムを受講する方法とした。このオンライン学習プログラムは、6つのeModules (GOARN及びセキュリティ啓発研修)と 5つのWHO Video Lecturesの2部門で構成された。本プログラムの概要を別添資料1に示す。

ワークショップ研修の内容は、国際的な多職種の専門家から構成されるGOARNチームへの参加に備えるための講義や、過去にGOARNへ派遣された専門家の経験共有、IPCの取り組み等に関するケーススタディ及びグループディスカッションを含めた。ワークショップ研修の学習項目を以下に示す。

学習項目

- ・ Introduction to the Global Outbreak Alert and Response Network and WHO WPRO
- ・ International Outbreak Investigations (applying TORs for priority tasks)
- ・ Applying the GOARN Code of Conduct
- ・ Public Health and Humanitarian Architecture and Landscape
- ・ Challenges and Well-being for deployment
- ・ Adapting interventions to the community
- ・ Designing field-appropriate IPC interventions
- ・ その他

GOARN派遣経験の発表を担当いただく日本人のスピーカーの選出については、GOARN及び日本関係者間で過去の日本人派遣者リストを元に検討した。派遣時の専門分野がIPC等であった派遣経験者を中心に3名(井手一彦先生、古宮伸洋先生、法月正太郎先生)を選出し、全員から参加の快諾を得た。

GOARN派遣期間中のWell-beingのセッションでは、GOARN講師陣が進行し、日本からの

派遣経験者である井手一彦先生、古宮伸洋先生、法月正太郎先生及び足立拓也先生（豊島病院）を迎えて、パネルディスカッション形式で進める形式とした。

さらに、今年度のワークショップ研修では本研究班の提案により「What and how can we utilize IPC practices and experiences in Japan in addressing for international outbreak response?」という新しいセッションを加えた。この第一部では、法月正太郎先生が派遣経験に関する発表を行う。第二部は、研究代表者の大曲貴夫先生がモデレーターを務め、法月先生が質疑に応答する対話形式で、日本でのIPC経験のうち現地で活かした点や、GOARN派遣者が相手国から快く受け入れられるヒント等を解説する。さらに、研修参加者からの質問にも応答するインタラクティブな手法をとった。

ワークショップ研修講師、運営関係機関は以下のとおりである。

GOARN・WHO講師

GOARN, WHO 本部, Geneva: Ms. Renee Christensen (Lead for Capacity Building & Training)

WHO 本部, Geneva: Ms. Alice Simniceanu (Infection Prevention and Control Specialist)

WHO WPRO, Manilla: Dr. Sharon Salmon (Infection Prevention and Control Specialist)

日本人講師 (GOARN派遣経験者)

厚生労働省医系技官 井手一彦先生 (Epidemiology and surveillance specialist、ロヒンギヤ難民キャンプにおけるジフテリア対策へ派遣)

和歌山医療センター 古宮伸洋先生 (Infection Prevention and Control specialist、リベリアにおけるエボラウイルス病対策へ派遣)

国立国際医療研究センター 国際医療協力局 法月正太郎先生 (Infection Prevention and Control specialist、フィリピンにおける新型コロナウイルス感染症対策へ派遣)

パネルディスカッション (GOARN派遣経験者)

豊島病院 足立拓也先生 (Case Management、イエメンにおけるコレラ対策及びバングラデシュにおけるジフテリア対策へ派遣)
前述の3名の日本人講師陣

開会式・閉会式スピーカー

WHO WPRO, Manilla: Dr. Sharon Salmon (Infection Prevention and Control Specialist)

厚生労働省大臣官房国際課国際保健管理官 梅木和宜

国立国際医療研究センター国際感染症センター長 大曲貴夫

国立感染症研究所感染症疫学センター第一室長 山岸拓也

前述のGOARN・WHO講師陣

主催・運営関係機関

主催：厚生労働科学研究費補助金（地球規模保健課題解決推進のための行政施策に関する研究事業）「国外の健康危機発生時に対応できる人材に必要なコンピテンシーの分析及び人材を増強するための研修プログラムの開発のための研究」

共催：GOARN、WHO（本部、WPRO）、事務局：国立国際医療研究センター（NCGM）国際感染症センター（DCC）

(4) GOARNで専門家として働くためのコンピテンシーテストの開発

さらに今年度は、GOARNに派遣される専門家として現場で活動するために必要なコンピテンシーを具体的に測定し分析することを目的とし、コンピテンシーテストを開発した。具体的には、GOARN Online Capacity Building and Training Portal (*GOARNのオンライン学習プログラムである)の以下の各e-Modulesテーマの中で、将来派遣される際に役立つと思われる出題を10問抽出し、オリジナル問題から内容を一部改変した。(別添資料2参照)本内容は、事前にGOARN、WHO講師陣からも確認を得た。

- 現場での活動;GOARN行動規範(Code of conduct) 3題
- 現場で直面する課題への対応 3題
- 多職種のチームワークでの働き方 3題

- Well-being 1題

GOARNのコンピテンシーに関する質問は多肢選択問題とし、他にテスト回答者の属性項目等も質問に含めた。回答対象者は、GOARNワークショップ研修の受講者とし、2日目の研修終了後に、オンライン形式で回答する方法とした。

(5) 研修応募者の選出方法

1) 参加者応募条件および募集要項

詳細は別添資料3を参照。

オンラインワークショップでも十分対応できる語学力を事前に確認する目的で、今年は応募申請書類に英語の検定証明書も含めた。

2) 公募プロセス

8月上旬：公募開始

8月下旬（その後、9月初旬へ延長）：応募期日

9月中旬：選考結果発表

3) 選定プロセス

応募時の対象人数は約30名と設定したが、52名からの応募があり、過去のGOARN研修参加の有無、各応募者の申請内容及び推薦状を元に、参加者条件の適合性をアセスメントした。選考の結果、IPC分野の専門性及び派遣申請の意思を確認でき、かつGOARN研修へ初めて参加希望する者を優先し、31名に絞り込んだ。日本在住の外国人留学生の応募者が数名いた。この中で、応募要件を満たし、母国で国際感染症のアウトブレイク対応の経験を有する人材1名は、本ワークショップ研修での積極的な参加が期待できると判断し、対象者とした。また、昨年の研修参加者だったことが理由で今年の選考から漏れた応募者の中で選抜された3名については、GOARN講師陣と調整のうえ、運営協力兼オブザーバー参加枠を設けた。

C. 結果

(1) ワークショップ研修の実施

2020年10月29日(木)～30日(金)の2日間のプログラムとして、オンライン (Zoom) 形式のGOARNTier1.5ワークショップ研修を

実施した。GOARN、WHOと本研究班の共同で開発した本ワークショップ研修のプログラムを別添資料4に示す。

研修参加者は事前に31名が登録されていたが、国内のCOVID-19対応のため2名が欠席となり、オブザーバー参加を予定していた3名が参加者へ昇格し、最終的に32名が参加した。応募時の回答(n=32名)によると、研修参加者の職業は、医師23名(72%)、看護師5名(16%)、学生2名(1%)、その他2名(1%)であった。所属先は、医療機関19名(59%)、大学5名(15%)、省庁4名(13%)、その他4名(13%)であった。所属先がGOARNパートナー機関であるか否かについては、GOARNパートナー機関である17名(53.1%)、GOARNパートナー機関でない15名(46.9%)であった。海外におけるアウトブレイク対応や保健医療活動に参加した経験は、あり20名(62%)、なし6名(19%)、記載なし6名(19%)であった。日本におけるアウトブレイク対応や保健医療活動に従事した経験は、あり24名(75%)、なし2名(6%)、記載なし6名(19%)であった。

今回、初めてオンラインでリアルタイム型ワークショップ研修を開催したことで、海外に駐在する日本人専門家も参加可能となり、日本を含む9か国から参加があった。その内訳は、日本(27名)、アメリカ(1名)、カナダ(1名)、ミャンマー(1名)、アフガニスタン(1名)、イギリス(1名)であった。

(2) 参加者からの研修評価

WHO、GOARNのオンラインサーベイを使用し、ワークショップ研修最終日に参加者より回答(n=31)を得た。結果概要は以下のとおり。主要な設問に関する結果の図表を別添資料5に示す。

研修評価については、1(very low)～5(very high)の5段階中、5(51.6%)、4(45.2%)、3(3.2%)との回答が得られた。今後の派遣のために最も役に立った研修項目(最大2項目までの選択式)については、Adapting interventions to the community (considerations for control measures)(61.3%)、Stories from former deployees (all sessions)(51.6%)、Designing field-appropriate IPC interventions(48.4%)の順に高かった。

本研修の内容は適切であり興味深かったかについては、「非常にそう思う」(58.1%)

「そう思う」(41.9%)が全回答を占めた。過去のGOARN派遣経験者からの課題と教訓の共有から、派遣の実際、利点、及び課題についての理解を深めることができたかについては、「非常にそう思う」(80.6%)「そう思う」(19.4%)、であった。本研修で学んだことは今後の派遣に役立つかについては、「非常にそう思う」(77.4%)「そう思う」(22.6%)、であった。本研修で学んだことは今後の日本での活動に役立つかは、「非常にそう思う」(48.4%)「そう思う」(35.5%)で83.9%を占めた。本研修への参加が今後の国際的なアウトブレイク対応に従事する意欲につながったかについては、「非常にそう思う」(77.4%)、「そう思う」(22.6%)、であった。本研修への参加が、GOARNやWPROのミッションの派遣への応募意欲につながったかについては、「非常にそう思う」(74.2%)、「そう思う」(25.8%)、であった。オンラインによる研修は国際的なアウトブレイクのオンラインでの対応について学ぶのに役立ったかについては、「非常にそう思う」(71.0%)、「そう思う」(29.0%)、であった。本研修をCOVID-19対策にあたる同僚に勧めたいかについては、「非常にそう思う」(67.7%)、「そう思う」(32.3%)、であった。

どの研修内容が最も興味深く役に立ったかを問う設問(記述式)では、「コミュニティでIPCの介入を行う方法に関するグループワークが良かった」、「既成概念にとらわれずに考えることが重要であると学んだ」、「日本人過去派遣者による経験共有のおかげで、GOARNの実際の派遣のイメージができた」、「チャットボックス(講師、他参加者とメッセージ交換できるZoom機能)が良かった」、「WHO講師によるグループのエンパワーメントとファシリテーションのスキルから多くのことを学んだ」等という記述があった。

研修の講師陣に対する満足度については、1(とても低い)から5(とても高い)のスコアをつける記述回答で、回答の大半が5もしくは4であったが、今後の本研修の改善案については、「参加者に国際色があると

良い」、「グループワーク(Zoomにおけるブレイクセッション)の際、他の参加者と直接話せないのが少しストレスがあった」、「オンライン研修において集中力を維持するのが大変だった」という意見があった。

(3) GOARNで専門家として働くためのコンピテンシーテストの結果

ワークショップ研修の全参加者(n=32名)が、本テストに回答した。スコアの中央値は10点満点中8点であった。スコアの範囲は、最低値5点~最高値10点であった。回答結果を別添資料6に示す。正解率は、eModule名別に”Well-being”が最も高く(100%)、”多職種のチームワークでの働き方”の質問の一つが最も低かった(43.8%)。後者は、IPC専門家としてGOARNに派遣された場合の登場人物の責任の範囲を問う内容であった。回答者の背景別スコアは、2019年のGOARNワークショップ研修の受講歴がある人の平均スコア(8.2)が、今回が本研修の初参加者である人の平均スコア(7.7)よりも高かった。WHOによる国外ミッションの経験有無別のスコアでは、経験あり(8.5)が、経験なし(7.3)に比べて高かった。本ワークショップ研修前に受講が必須とされた6つのe-Moduleの達成度による得点比較は、全て終わらせた人(7.7)のスコアが、いくつか終わらせた人(7.3)より高かった。また、何も受講できていなかった人が1名おり、その平均スコアが(8)となったため、全体で最も高い値となった。

D. 考察

今年のGOARN研修は、COVID-19による渡航制限の影響や密集を避けるために、開催が危ぶまれていた。しかし、この逆境を乗り越え、GOARN、WHO(本部、WPRO)、本研究班の連携が強化され、世界初のIPCに特化したオンラインTier1.5ワークショップ研修を実現することができた。WHO・GOARNによるCOVID-19への取り組みに関する最新情報からGOARN派遣現場におけるIPCの優先課題の理解、コミュニティで現場に即したIPCを効果的に実施する方法、日本でのIPCの経験を派遣現場でどのように活かせるか、といった実務に役立つ内容が盛り込まれた研修となった。こうした内容について、

経験豊富なWHO講師陣や日本からのGOARN派遣経験者を交えて非常にインタラクティブなワークショップで学べたことは、研修参加者にとって貴重な機会を提供できたと考える。

終了時に実施した研修参加者のサーベイ結果によると、研修参加者からの研修評価は非常に高く、各自の研修参加目標も概ね達成された。また回答者の100%にとって、本研修で学んだことは今後の派遣に役立つ内容であり、本研修への参加が今後の国際的アウトブレイク対応に従事する意欲や、GOARNやWPROのミッションへの応募意欲につながったことが確認された。

今後の派遣のために最も役に立った研修項目(選択式)について、回答数の多かった上位3項目は、Adapting interventions to the community (considerations for control measures) (61.3%)、Stories from former deployees (all sessions) (51.6%)、Designing field-appropriate IPC interventions (48.4%)であった。

Adapting interventions to the community (considerations for control measures)は、Ms. Christensenが進行を務め、3つのグループごとにそれぞれが、1. フェイスマスク、2. 自宅隔離、3. 安全な埋葬のいずれかの感染症対策について、現地のコミュニティにおいて感染症対策にネガティブに影響する可能性のあるもの、どのように感染症対策をコミュニティに適応し根付かせるか、誰が感染症対策をサポートするキーパーソンとなる人物となるかを討議したセッションである。研修参加者にとって、現地のコミュニティにおいて起こりうる文化的差異をブレインストーミングし、多角的な視点で課題を想定することで、具体的な対応策を考える機会となったと考えられる。

Stories from former deployees (all sessions)は、井手一彦先生、古宮伸洋先生、法月正太郎先生によるGOARN派遣経験の共有であった。井手一彦先生はロヒンギャ難民キャンプにおけるジフテリア対策への派遣経験を、ケーススタディを交えて紹介した。研修参加者はGOARN派遣におけるマナーや、実際に派遣された際に取り組むべ

き優先事項についてグループワークを通して学ぶことができた。古宮伸洋先生はリベリアにおけるエボラウイルス病対策への派遣経験を共有した。研修参加者は、臨場感の溢れるセッションを通し、WHO・GOARNを代表して派遣されるということ、現場の社会背景を適切に理解し柔軟に対応すること、予期せぬ事態に備え、安全を確保することの重要性に関する理解を深められたと考えられる。法月正太郎先生はフィリピンにおけるCOVID-19対策へ派遣された経験を共有した。発表により、COVID-19拡大を受け、刻一刻と状況が変化する現地での感染症対策の難しさを学び、現地で受け入れられるIPC介入についても情報を得られるセッションとなった。日本でCOVID-19対応に従事する者も多い今回の研修参加者にとっては、大変興味深い内容であったと考えられ、講義後の質疑応答も活発に行われた。

Designing field-appropriate IPC interventionsはDr. Salmonが進行を務めた。具体的には、3つのグループに分かれ、1. 医療用PPE (Personal Protective Equipment) のないコミュニティにおける自宅で患者の世話をする方法についての指導、2. 清潔な水に限られるコミュニティにおける手指衛生の促進、3. 地域のクリニックにおける適切な廃棄物管理の促進について、IPC専門家としてどのような貢献ができるかを討議した。日本国内における感染症対策で使用されている物資が現場で欠如した際の工夫、現地に即した対応について思考を巡らせることで、研修参加者は現地に適応できる柔軟性を身につけられたと考えられる。

次に、最も興味深く役に立った研修内容を問う設問(記述式)では、派遣先の現地におけるコミュニティでIPCの介入を行う方法についてのグループワークに前向きな評価コメントが多く聞かれた。理由の一つとしては、研修参加者が、派遣先の困難な状況で、いかにIPCの技術支援をできるかというGOARNの実際の派遣イメージを持つことができたためと考えられる。加えて、プログラムを通してオンラインセッションが続く中、本グループワークは各グループ

に割り当てられたWHO講師陣や他の研修参加者と双方向にコミュニケーションがとれるセッションであった点も好印象であったと考えられる。過去派遣者からの経験共有の講義についても高い評価コメントが多く寄せられた。これは研修参加者がこれまで派遣の実際について知見を得られる機会が限られていたことより、派遣経験者から、GOARN派遣に至った経緯から申請登録、派遣前準備、現地での活動や困難な状況への対処、自身のwell-being(心身の健康状態の確保)、帰国までの一連を学べたことが興味深く、役に立ったものと考えられる。

職業別参加者の割合については、医師(72%)は昨年と同等であったが、看護師(16%)については昨年の2%に比べて増加した。一方、昨年12%の割合を有した研究者は、今回の研修では1%に満たなかった。所属先で高い割合を占めた医療機関(59%)については、昨年の50%より増加した。これは、今回の研修がIPCに特化したものであり、臨床現場でIPCに携わる専門家の参加が増えたためと考えられる。今回の研修参加者の約75%は、日本におけるアウトブレイク対応や保健医療活動に従事した経験のある専門家であった。しかし、海外におけるこうした活動への経験は約60%に限られていたこともあり、本研修における教授法を通じて、多くの研修参加者が実際の派遣や直面する課題と解決策等を具体的にイメージする助けになったと考えられる。

今回初めて実施したGOARNで専門家として働くためのコンピテンシーテストの結果について、4つのテーマ別には、総合的に平均スコアは高かった。しかし、多職種ของทีมの中で従事する場面設定において、自分の責任範囲に関する設問のスコアが最も低かった。派遣を実際に経験しないと、現場の状況が変化する中で自分の立場を具体的に想像し難いと想像されるが、専門家としての責任範囲の理解は重要である。よって、今後のGOARN研修の機会に、このコンピテンシーを高めるために役立つ内容を盛り込むことが望ましいと考える。

回答者の背景別には、GOARNワークショップ研修の受講歴がある人や、WHOによる国外ミッションの経験を有する人は、これらの経験がない人に比べてスコアが高い傾向が確認された。また、本ワークショップ研修前に受講が必須とされた6つのe-Moduleの達成度別には、全て終わらせた人ほどスコアが高い傾向も確認された。なお、何も受講できていなかった人(1名)の平均スコアが最も高くなった点については、何も受講できていなかった集団としての平均スコアと解釈するのは現実的ではないと考える。全体的に、GOARNで専門家として働くためのコンピテンシーは、派遣機会の限られるWHOによる国外ミッションの経験だけでなく、研修受講によっても高めることができる点は、研修実施の意義づけになると考えられる。

今年度は、COVID-19の世界的拡大を受けてやむを得ずオンラインでの開催となったものの成功を修めた研修となった。しかし、研修のオンライン化には利点と欠点の両者があると考えられる。参加者から評価された点は、研修会場まで移動する時間を省くことができた点、従事している業務や家事等との調整がしやすかった点等であった。COVID-19等の対応で多忙を極める研修参加者にとって、オンライン開催は参加しやすいものであったと考えられる。実際に日本全国各地や海外からの参加者がいたことも、この利点を裏付けるものである。研修運営側にとっては、オンライン化したことにより、対面形式による研修に起因するCOVID-19感染のリスクを払拭し、海外から参加したWHO・GOARN講師陣と共に日本の専門家のためのGOARN研修を昨年に続き実現できたことが最大の利点となった。一方で、研修参加者からのネガティブな意見は、他の参加者等とのネットワーキングができなかった点やグループワークの難しさ、参加者の機材でインターネットの接続不良が起こった点等であった。これらの点については、オンライン研修の場合、研修参加者同士がマンツーマンで会話ができる環境がないため、研修参加者がそのように感じた可能性がある。また、グループワークについては、対面の研修よりもモニ

ター経由で発言のタイミングをつかむ難しさがあると感じた参加者がいたと考えられる。運営の立場では、研修中に参加者のビデオがオフにされた際の受講状況の確認が困難であった点が、今後の課題であるといえる。

今回の研修終了後に、WHO、GOARNの講師陣と本研究メンバーで研修のレビューを実施した。オンライン研修であったにも関わらず、講師陣と研修参加者の間で円滑に対話でき、さらにGOARN派遣経験者と研修参加者との間に一定のコネクションを築くことができた点が特に評価された。

WHO、GOARNからは、研修参加者の熱意溢れる受講姿勢に対し高い評価を受けるとともに、本研修が今後のGOARN派遣につながることを期待された。同時に、GOARN研修ホスト国として日本は非常に優れており、是非今後も共同作業に取り組みたいとの前向きなコメントも頂いた。

今後のGOARN研修については、オンライン研修の場合、WPRO地域の他国とも合同で実施することも可能であると考えられる。これにより本格的な国際研修となり、他国のGOARNパートナー機関や参加者とのネットワーク強化も促進できる。さらに、COVID-19の感染が落ち着けば、実際のGOARN派遣現場のように再現された屋外での演習を含めたGOARNTier2.0研修を是非、日本で開催したいと考える。

E. 結論

GOARN、WHO(本部、WPRO)、本研究班の強い連携により、世界初のIPCに特化したオンラインTier1.5ワークショップ研修を実現できた。32名の専門家の能力が強化され、研修参加者から非常に高い研修評価を得られた。また、研修参加者を対象にしたGOARNで専門家として働くためのコンピテンシーテストを開発し、分析結果から今後の能力開発に役立つ情報も得られた。今後のGOARN研修については、オンライン研修の場合、WPRO地域の他国とも合同で実施することも可能であり、これにより他国のGOARNパートナー機関や参加者とのネットワーク強化も促進できる。

F. 健康危機情報 該当なし

G. 研究発表

1. 論文発表

Fujita M, Umeda T, Fujita N, Nishioka T, Iwamoto A, Ohmagari N, Ishikane M, Akashi H, Kokudo Norihiro. Japanese WHO Collaborating Centres (WHO CCs) fight against COVID-19. Glob Health Med. 2021 Apr 30;3(2):115-118.

2. 学会発表

李 祥任, 石金 正裕, 野本 英俊, Sharon Salmon, Renee Christensen, 大曲 貴夫. 国外の健康危機発生時に対応するための人材育成プログラム開発の進捗と今後の課題 -WHOとの共同によるGOARN人材育成研修の実施と評価-, グローバルヘルス合同大会2020大阪, 11月1-3日, 2020. WEB開催.

H. 知的財産権の出願・登録状況 (予定を含む)

1. 特許取得

なし。

2. 実用新案登録

なし。

3. その他

なし。

Pre-Course work for GOARN Workshop “Orientation to international outbreak response with GOARN/WPRO”

In preparation for your participation at the virtual GOARN workshop you are kindly requested to complete the following eModules:

Part 1 is required as pre-course work for this virtual workshop and is also mandatory for pre-deployment with GOARN. It consists of a series of short eModules:

1. [The Global Outbreak Alert and Response Network](#)
2. [Working with GOARN in the Field](#)
3. [The Public Health Emergency and Humanitarian Architecture and Landscape](#)
4. [Working in an International Multidisciplinary Outbreak Response team](#)
5. [Personal Well-being for Deployment](#)
6. [BSAFE](#)

Part 2 is recommended as pre-course work (but not required) and is mandatory for pre-deployment with GOARN/WHO. It consists of a series of short video lectures comprising the WHO Health Emergencies Programme online Incident Management Training.



1. Working in WHO's Incident Management System
2. Incident Management System Functional Areas
3. Ethics and Values
4. Team dynamics
5. Me and the Mission

Part 3 is recommended reading as pre-course work if time permits. Participants are encouraged to familiarize themselves with the IPC guidance documents for COVID-19:

<https://www.who.int/westernpacific/emergencies/covid-19/technical-guidance/infection-prevention-control>

Instructions for enrolling in and completing the eCourses

Part 1: GOARN

<p align="center">Module 1</p> <p align="center">The Global Outbreak Alert and Response Network</p>  <p align="center">20 minute interactive eCourse</p>	<p align="center">Module 2</p> <p align="center">Working with GOARN in the Field</p>  <p align="center">35 minute interactive eCourse</p>
<p align="center">Module 3</p> <p align="center">The Public Health Emergency & Humanitarian Architecture & Landscape</p>  <p align="center">25 minute interactive eCourse</p>	<p align="center">Module 4</p> <p align="center">Working in an International Multidisciplinary Outbreak Response team</p>  <p align="center">25 minute interactive eCourse</p>
<p align="center">Module 5</p> <p align="center">Personal Well-being for Deployment</p>  <p align="center">25 minute interactive eCourse</p>	<p align="center">Module 6</p> <p align="center">BSAFE</p>  <p align="center">60 min interactive eCourse</p>

To access these eModules, you will need to create an account on the GOARN Learning Management System.

Step 1. Follow the link below to access the GOARN Learning Management System:

<https://extranet.who.int/goarn/user>

Step 2. When logging in for the first time, please select the tab *Create New Account*, and enter all required fields and click the green button *Create new account*. You will then receive an email with your password and be asked to activate your account.

GOARN

Home About us Activities Media Contact us Focal point login Training login

User account

Log in **Create new account** Request new password

Username or e-mail address *

Password *

LOGIN

Step 3. Log into the GOARN Learning Management System. For modules 1 & 2, select the “My Trainings” tab on the left hand navigation panel. You have already been pre-allocated these three eModules in English language.

GOARN

Home » My trainings

Course category ▾

GOARN The Global Outbreak Alert and Response Network (GOARN)

THE GLOBAL OUTBREAK ALERT AND RESPONSE NETWORK (GOARN): ENGLISH LANGUAGE WITH AUDIO (HIGH BANDWIDTH)

Working with GOARN in the Field

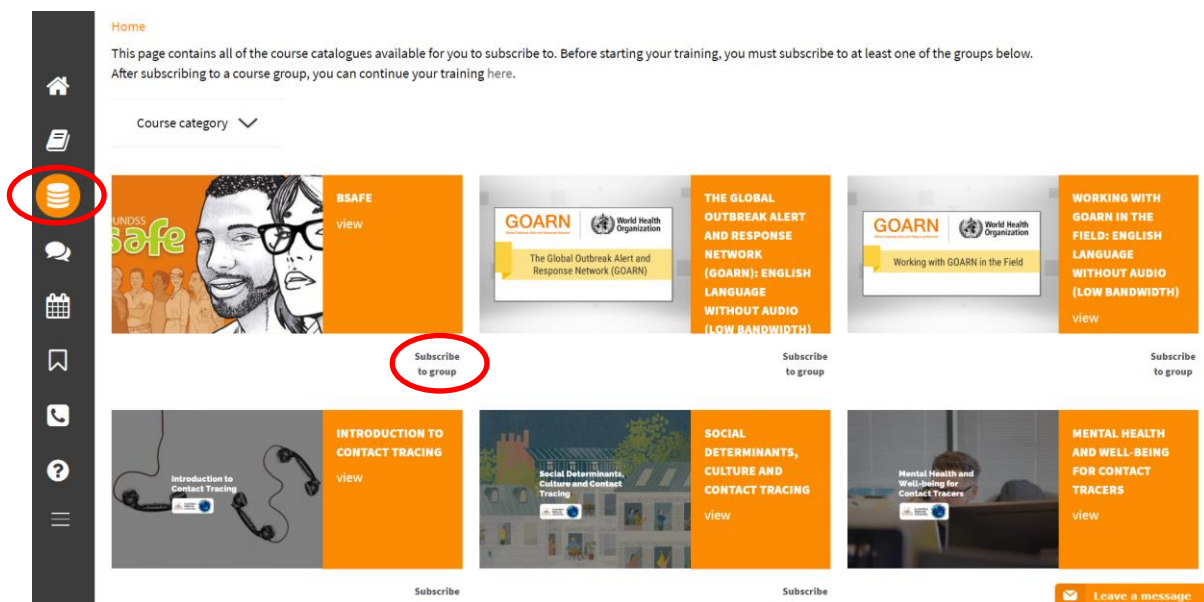
WORKING WITH GOARN IN THE FIELD: ENGLISH LANGUAGE WITH AUDIO (HIGH BANDWIDTH)

view

progress: 0%



progress: 0%

Step 4. For eModules 3-6, navigate to the “Training Catalogue” tab and click to “subscribe” on each of the required courses. After you have subscribed, these courses will be allocated to you and you will find them back in “My Trainings” where you can launch the courses.



Step 4. To launch the eModules, simply click on the “play” arrow underneath your chosen module and follow the instructions.

Part 2: IMS Tier 2: Working in WHO's Incident Management System

<p align="center">Module 1 Working in WHO's Incident Management System</p>  <p align="center">16 minute video lecture</p>	<p align="center">Module 2 Incident Management System Functional Areas</p>  <p align="center">15 minute video lecture</p>
<p align="center">Module 3 Ethics and Values</p>  <p align="center">26 minute video lecture</p>	<p align="center">Module 4 Team Dynamics</p>  <p align="center">15 minute video lecture</p>
<p align="center">Module 5 Me and the Mission</p>  <p align="center">16 minute video lecture</p>	

- Go to the platform www.OpenWHO.org
- Create your login
- Accessing courses:
 - To access this course, either enter the title into the "Search Courses" function on the homepage OR navigate to the "Channels" tab on the upper frame and select "Ready for Response". Select the course titled and click "Enroll me for this course"
- Within each course, Modules can be selected from the left-hand navigation panel
- You can work through the module content by clicking on the hyperlinks to documents and videos.

GOARN Training Post-Course Work
Post-test

[Background information]

Ebola outbreak occurred in Équateur province in the Democratic Republic of the Congo (DRC). Due to an increasing risk of expanding Ebola to neighboring provinces, emergent meeting was held among DRC and international organizations. Under the circumstances, GOARN is seeking support from GOARN partner institutions to help identify **Infection Prevention and Control (IPC) specialists** to provide technical support in this outbreak response in DRC.

You are Marie, a fifth-year infectious disease doctor working in the department of infectious diseases, Hanasaki General Hospital in Tokyo which is the WHO GOARN Partner institution. You were selected as a candidate to apply for this GOARN mission by the director of the department (who is an incident manager), and applied for GOARN. In one week later, you received the official acceptance for deployment from GOARN Operational Support Team. You will be deployed to DRC under the following conditions.

Duration: from November 1st to November 30th, 2020

Team members: Laboratory Specialist, Epidemiologist, Risk Communications and Community Engagement Specialist

Counterpart organization: Ministry of Health, DRC

Terms of reference : Work together with MOH, health facilities and partner organizations for effective IPC.

[Please answer the following questions]

Q1.

While on a GOARN deployment, the deployee works under the leadership of WHO, but follows the regulations of their home institution depending upon the situation. Answer true or false.

True/False

Q2.

While on GOARN deployment, it is up to an incident manager of the Hanasaki General Hospital to decide if Marie should interact with the press/media. Choose one correct answer.

True/False/It depends upon the situation

Q3.

Upon completion of a GOARN deployment, a deployee has full rights to use the collected data for their own, or their institution's research and publication purposes if a deployee confirm clearance from both information and management lead of GOARN and a representative from their home institution. Choose one correct answer.

True/False/It depends upon the situation

Q4.

As a GOARN deployee, you will be sent to work within a team environment. You may arrive without knowing any of the team members. What actions do you need to take in this situation? Choose all the answers that apply.

1. Be able to adapt and effectively join and work with a diverse range of individuals and teams.
2. Possess the capacity to integrate quickly.
3. Build trust with fellow team members and individuals from other units or organizations.
4. Swiftly establish ways to contribute to positive, productive, effective ways of working together.
5. Do not exchange contact information with each member of the team by considering their privacy.

Q5.

You will often be joining an on-going outbreak or public health emergency response. What attitudes do you need to take to move forward in a changing environment? Choose all correct answers.

1. Be open and flexible to different ways of working and operation
2. Exhibit willingness to refuse to compromise
3. Exclude other perspectives

Q6. Choose all correct answers.

Which of the following could be actions you require during an outbreak or public health emergency response? Choose all correct answers.

1. Effectively analyze and interpret data.
2. Ensure that you are working an informed environment.
3. Exercise critical judgement in making informed decisions(individual/group)
4. Make an assessment based on the WHO recommendation standard when you visit the site.
5. Introduce effective IPC guideline of WHO and ask the counterpart organization entirely rewrite their guideline.

Q7.

Which of the following could be Marie's responsibilities during this time? Choose all correct answers.

1. Reviewing the medical consumables required for case management
2. Evaluating patient flow in a health care facility
3. Evaluating adherence to standardized treatment protocols
4. Politely refrain from providing direct response on epidemiological related advice when Marie is asked by the counterpart and then communicate with the GOARN epidemiological expert promptly.

Q8. A GOARN team member, Christopher has been working long hours to implement the control measures, but to no avail. Another member of Julian has been doing his best to get the proper messaging out into the community, but it doesn't seem to be helping.

Lately you have noticed that Christopher is much more withdrawn than usual. He doesn't speak often and always looks tired. Yesterday, he yelled at Mehdi during a team briefing.

What do you think the team should do to help Christopher? Select all answers that apply.

1. Mind their own business- people get disgruntled in the field often, so it's not a big deal.
2. Approach Christopher to see if he wants to talk about what's going on and how he is doing.
3. Talk to your team lead about ways you could support Christopher.
4. Suggest that Christopher go out for a drink so he can get his mind off work.
5. Approach Christopher to see how he feels. Since he is seriously withdrawn, suggest him to leave the team and return to his home country.

Q9. At the end of a busy workday, the team is having a debriefing meeting. Each member expressed how they feel about the briefing and their workloads. Jamila reports that a whole new batch of sample data came in last night, and she has spent all day trying sort and analyse them. As a result, she is very behind on her paperwork and data entry tasks. She has scheduled an upcoming laboratory training and still has to photocopy all her training materials. She feels frustrated, but hesitates to ask for help.

What do you think is the **best** solution for this workload imbalance?

1. Marie worked hard-she deserves a break. Julian's work is non-essential, so he can help Jamila.
2. Everyone should stick to their assigned roles of expertise, and no one should take on other expertise.
3. Because Marie finished early, she should help Jamila with some of the material tasks so that Jamila can finish analysing sample data.
4. Because Christopher and Mehdi basically do the same job, one of the should help Marie.

Q10.

You should not pack comfort items which are not related with GOARN activities even though you can feel comfortable with these items, including headphones, ear plugs, favorite snacks or brands of

food/drinks. Answer true or false.

True/False

Basic information

1. Is this your first attendance to GOARN Tier 1.5 training?

- yes
- no, I participated in the training held in December 2019 in Tokyo too.
- no, I participated in the training held in December 2019 in Tokyo, and more.

2. Your completion level of eModules in pre-course work for this GOARN workshop

Part 1: required as pre-coursework

1. The Global Outbreak Alert and Response Network
2. Working with GOARN in the Field
3. The Public Health Emergency and Humanitarian Architecture and Landscape
4. Working in an International Multidisciplinary Outbreak Response team
5. Personal Well-being for Deployment
6. BSAFE

Part 2: recommended as pre-course work

1. Working in WHO's Incident Management System
2. Incident Management System Functional Areas
3. Ethics and Values
4. Team dynamics
5. Me and the Mission

(1) Completion level of 6 short eModules in Part 1

All some eModules None of these

(2) Completion level of 5 short eModules in Part 2

All some eModules None of these

4. About your international field experience with WHO abroad

- yes
- no

5. About your institute/organization

- GOARN partner institute
- Non-GOARN partner institute
- I don't know

国際感染症対策

WHO GOARN 派遣人材育成オンライン研修（IPC コース）2020 参加者募集

GOARN (Global Outbreak Alert and Response Network) は、世界保健機関 (WHO) やパートナー機関により設立されたエボラ出血熱等の国際感染症の危機発生時に世界屈指の感染症対策チームを迅速に派遣・運営する国際的な枠組みです。GOARN ミッションへの派遣には、GOARN 研修の修了や国際的なアウトブレイク対応の経験が重視されています。そこで国立国際医療研究センター国際感染症センターGOARN 研究班は、2019 年度より、WHO の協力を得て、GOARN 研修 (GOARN Tier 1.5 Training Workshop) を日本で開催しています。本研修は、昨年度に引き続き GOARN 派遣に有用な情報を提供するとともに、IPC (Infection Prevention and Control) に特化した GOARN 派遣人材を育成する機会とすることとなりました。昨今の新型コロナウイルス感染症の急速な状況変化を鑑み、本研修は、オンラインでの実施となります。WHO の講師陣による貴重な研修の機会ですので、是非、奮ってご応募下さい。

■ 募集要項

GOARN Tier1.5 Training Workshop とは :

派遣前必須オンラインコースの Tier 1 と国際的他職種のアウトブレイクチームに備える Tier2 の中間コースであり、以前派遣された専門家の体験談、ケーススタディやグループディスカッションを含むワークショップ。今回の本コースは感染予防管理に特化した Tier 1.5 オンラインコースである。

目的：国際的なアウトブレイクへの対応にはフィールドレベルでの IPC が不可欠な要素であり、IPC の強化に従事する専門家の役割は多様化している。GOARN と WHO の多職種の国際ミッションに参加する上で、必要とされるプロセス、チャレンジや実態を把握するとともに、IPC 分野に特化した本コースにより、GOARN ミッションに貢献する上で必要とされる IPC 専門家としてのスキルと知識、柔軟性を身につけ、ワークショップを通してアウトブレイクへのアプローチの仕方を習得する。

開催日：

1. 研修前自習

リアルタイム研修の 2~4 週間前に各自オンライン自習教材を用いて実施する。ケーススタディはグループワーク※で実施。(※変更可能性有)

2. リアルタイム研修

2020年10月29日(木)～30日(金)

(一日4時間を最大とした2日間)

3. 研修後自習

各自オンライン自習教材及びアンケートフォームを用いて実施する。

■ リアルタイム研修について

日時：2020年10月29日(木)17:00～21:00

2020年10月30日(金)17:00～21:00 (時間変更の可能性有)

参加費：無料

開催方法：オンライン形式

対象人数：約30人

使用言語：英語(通訳なし)

応募締め切り：2020年8月31日(月)朝9時

■ 参加者応募条件

1) 教育歴

感染症に関連する分野における学士号取得者：公衆衛生(Public Health)、感染管理(Infection Prevention and Control)、検査(Laboratory)など。さらに、同分野の修士号以上の学位があると望ましい。

2) 経験

- 最低2回のアウトブレイク調査ミッションに参加している。(国内外を問わない)もしくは、院内、国内、国外のいずれかにおけるアウトブレイク対応の経験がある。
- 国立感染症研究所 実地疫学専門家養成コース(FETP)(卒業生含む)
- 感染症危機管理専門家養成プログラム(IDES)(卒業生含む)
- 国際緊急援助隊(JDR)感染症対策チーム登録者のうち、導入コース修了者

- 国立国際医療研究センター国際感染症センター（DCC）で国際感染症対応の実務経験を有する。
- 当該分野における5年以上の実務経験を有する。

3) スキル

以下の派遣に必要なスキルを有する。

- 優れたコミュニケーション及び交渉スキル
- 優れた分析・計画・組織対応力
- チームワークを尊重し業務可能なスキル
- 重圧の状況下においても業務を遂行する力

4) 語学力

以下の語学力を有し、国際ミッションで円滑に業務が可能な英語力を有する。

英語：TOEIC730点以上、TOEFL550点(iBT79点)、IELTS6.0以上

5) 派遣への意思

GOARN と WHO の国際ミッションに参加を希望している。

- * 英語検定の証明書を提出必須とする。検定未受講の場合は相当する証明書（例：英語での国際コースの受講証明など）を提出必須とする。

■ 応募方法

以下のリンクから応募フォームに必要事項をご記載ください。

- ・初参加者はこちら↓

<https://formok.com/f/h5kv8iau>

- ・昨年度（2019年12月5～6日）参加者はこちら↓

<https://formok.com/f/ghxxi4j2>

必要書類：参加応募条件に記載された必要スキルの観点について述べた推薦状（英文1通）を応募フォームのページから提出ください。

- ・参加確定者は、研修前までに GOARN Tier1.5 のオンライン講習の受講が必要です。確定者に追ってご案内いたします。
- ・9月上～中旬 選考結果発表予定

主催：厚生労働科学研究費補助金（地球規模保健課題解決推進のための行政施策に関する研究事業）「国外の健康危機発生時に対応できる人材に必要なコンピテンシーの分析及び人材を増強するための研修プログラムの開発のための研究（研究代表者：国立国際医療研究センター国際感染症センター センター長 大曲貴夫）」

事務局：国立研究開発法人 国立国際医療研究センター（NCGM）国際感染症センター（DCC）

GOARN 派遣人材育成プログラム参加者応募窓口

E-mail: ncqm@jc-inc.co.jp



29 October 2020 – 4 hours

Time (JST)	Session Title	Session description
17:00~17:30 (30 mins)	Opening Remarks and introduction	Opening remarks and introductions
	Welcome by Representatives of MHLW · Japan Research Team & WHO	
	Introduction to workshop	
	Agenda and objectives of the workshop	
17:30~18:10 (40 mins)	GOARN, WHO & WPRO	Overview of GOARN, WHO and WPRO
	Overview of GOARN WHO and WPRO and how they have been working in response to COVID-19	
	IPC lessons learned from COVID-19 response	Context for how GOARN supports WHO with outbreak response
5 min break		
18:15~19:35 (80 mins)	International outbreak investigation & response	Setting the scene for when an outbreak response requires international assistance in general and for IPC.
	When international assistance is required (and enabled)	
	Deploying with GOARN – reflections from former deployees: Special Guest Speaker Dr Ide	The deployment process with GOARN/WHO – stories from deployees
	Priority tasks of a deployed IPC specialist	Priority tasks for an IPC specialist working in an outbreak response
5 min break		
19:40~20:25 (45 mins)	Working for GOARN and WHO in international outbreak response	Potential scenarios and circumstances deployees can find themselves in when working in the field.
	Challenging situations for deployees working in IPC	
	Applying the GOARN Code of Conduct in these situations	Following the GOARN Code of Conduct.
20:25~20:55 (30 mins)	Stories from the field: experience by a former deployee	Deployment experience of a former deployee who worked in response to Ebola in Liberia 2015
	Special Guest Speaker Dr Komiya	
20:55~21:00 (5 mins)	Wrap up for Day 1	

30 October 2020 – 4 hours

Time (JST)	Session Title	Session description
17:00~17:30 (30 mins)	Welcome to Day 2	Recap of Day 1 and overview of Day 2
17:30~18:00 (30 mins)	What and how can we utilize IPC practices and experiences in Japan in addressing for international outbreak response?	Reflection of best IPC practice in Japan and how to apply this in an international setting
	Special Guest Speakers: Dr Norizuki & Dr Ohmagari	
18:00~19:00 (60 mins)	Adapting IPC interventions to the community Potential secondary impacts & cultural considerations Communicating with communities for the successful implantation of IPC interventions	The challenges and benefits for an international deployee in communicating and engaging with communities. Designing and delivering culturally appropriate control measures.
5 min break		
19:05~20:05 (60 mins)	Designing field-appropriate IPC interventions Practical examples of what works in different response contexts	Tips and tricks for IPC interventions in low-resource settings
20:05~20:45 (40 mins)	Personal wellbeing on deployment Considerations and potential challenges of international outbreak response Advice for mental and physical wellbeing pre, during and post deployment	Survey of possible challenges and plenary debrief using wordcloud Panel of former deployees for Q&A on well-being
20:45~21:00 (15 mins)	Review and Closing Benefits of deployment – individual & institutional Review of the course expectations Final recommendations for future GOARN deployees	Advice from former deployees on benefits of deployment Workshop summary

資料4. GOARNオンラインIPC研修 参加者へのWHOアンケート調査結果

End of virtual workshop evaluation – Introduction to International Outbreak Response with GOARN and WHO

アンケート実施者：WHO GOARN Faculty
2020年10月20-30日研修終了後に回収

On a scale of 1 (very low) to 5 (very high), how do you evaluate this virtual workshop overall?

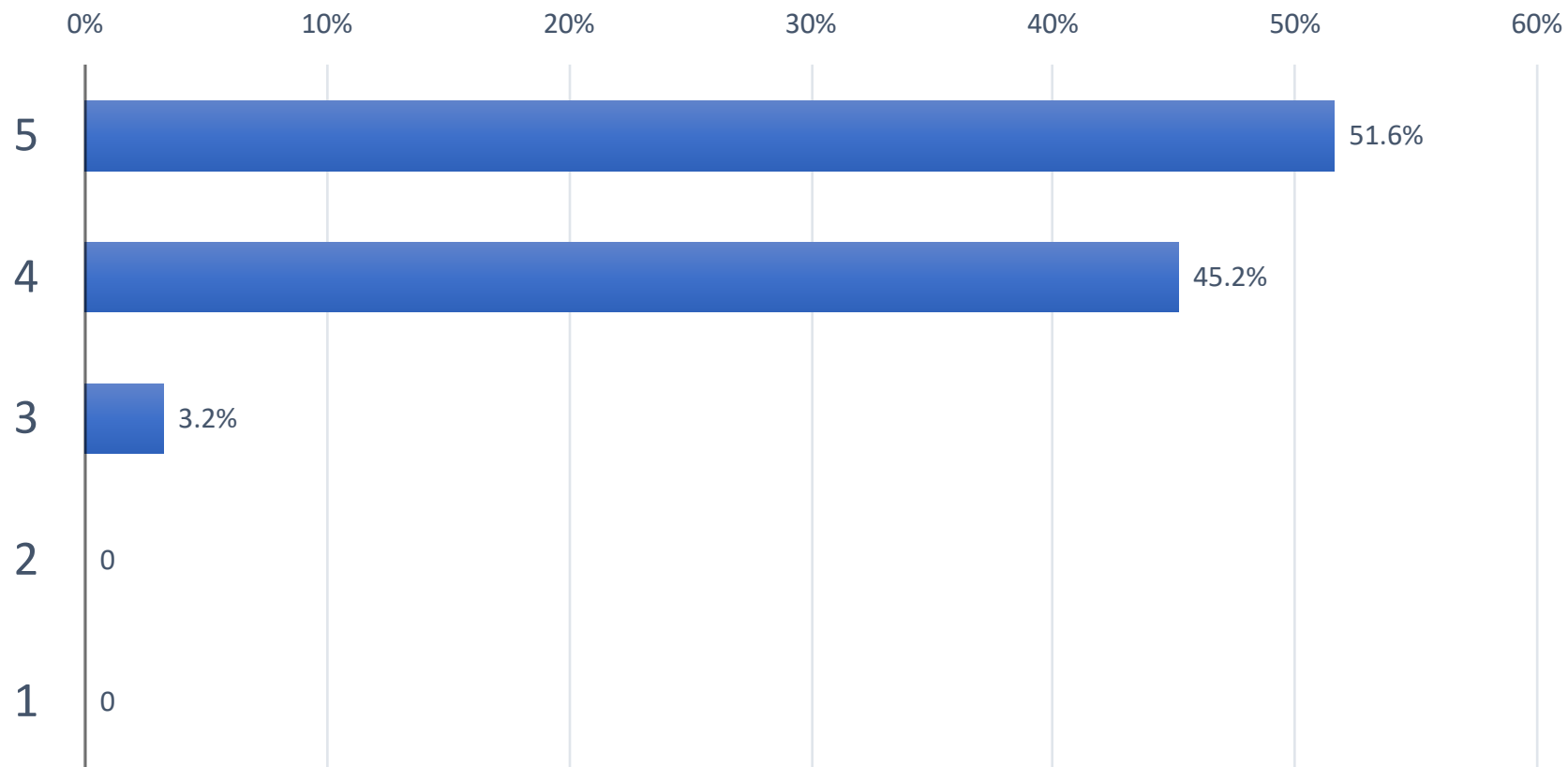


図1. 研修に対する総合評価 n=31 (回収率97%)

Please select the two training workshop topics that you think will be most useful to you on a future deployment.

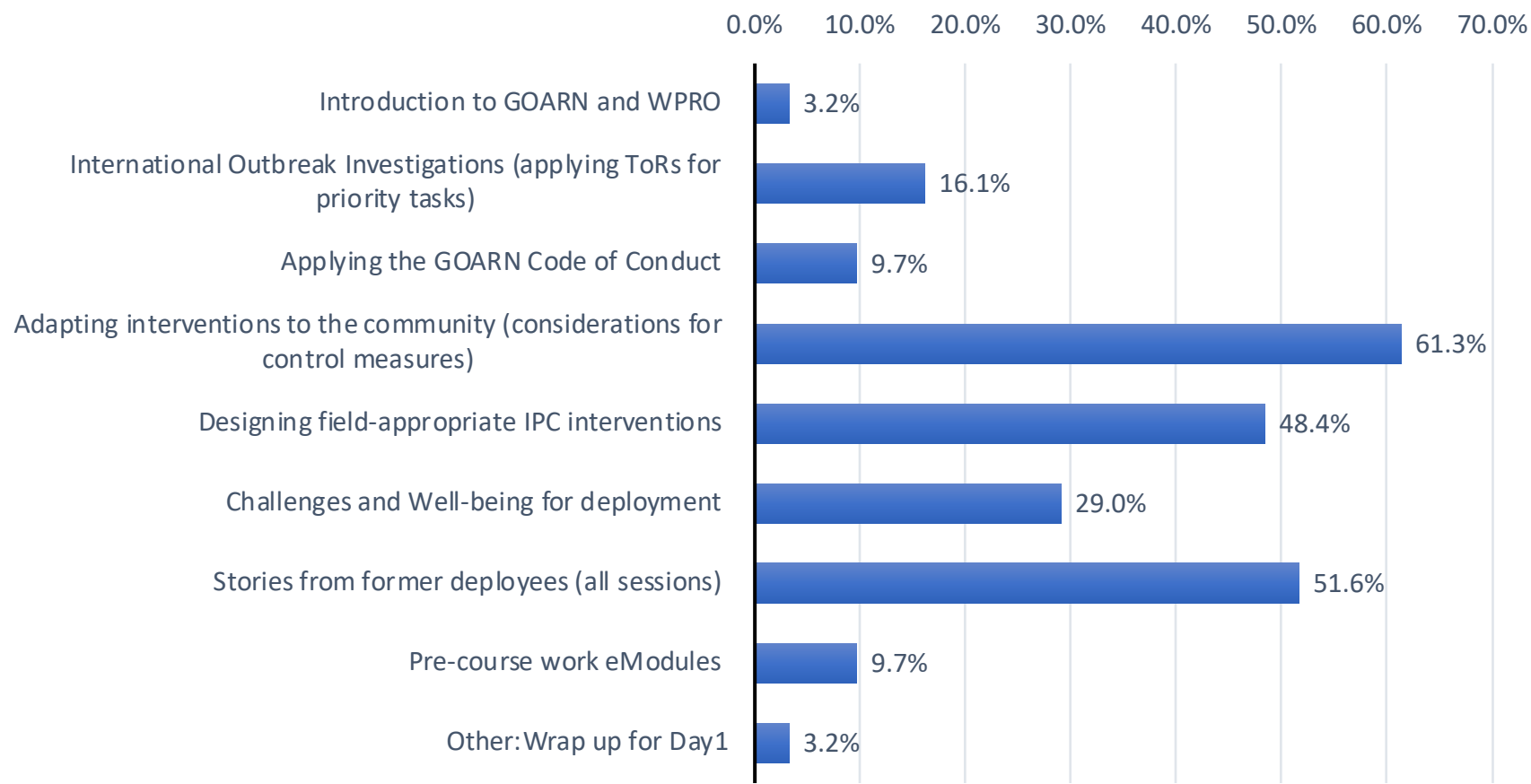


図2.今後の派遣のために最も有用と感じた研修内容 (n=31) (2項目/人を選択)

0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%

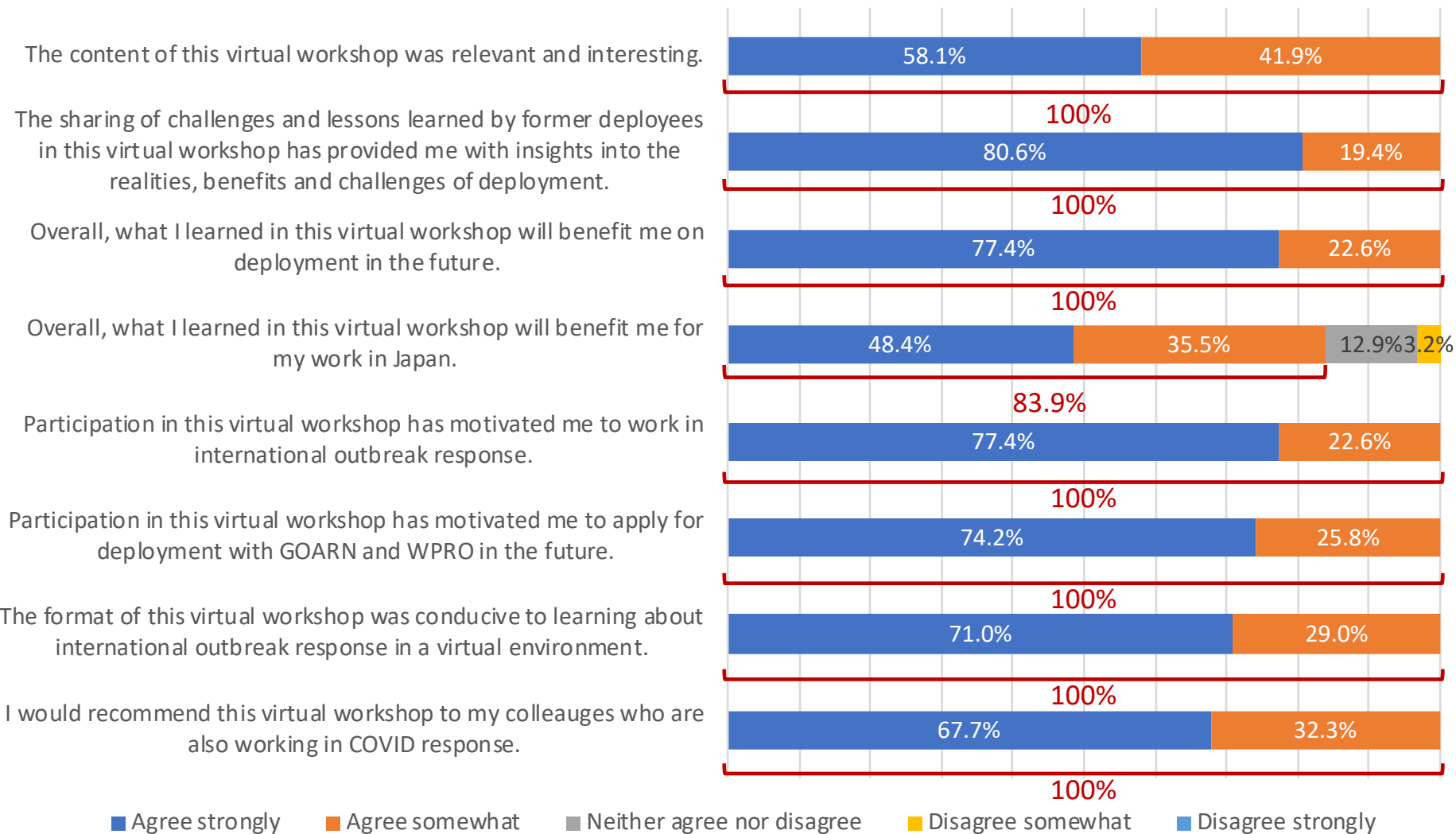


図3. 受講者による研修評価 (n=31)

どの研修内容が最も興味深く役に立ったか？ (自由記述回答の主要意見)

「コミュニティでIPC介入する方法について話し合ったグループワークが良かった」

「既成概念にとらわれずに考えることが重要であると学んだ」

「日本人過去派遣者による経験の共有のおかげで、GOARNの実際の派遣のイメージができた」

「チャットボックス（講師、他参加者とメッセージ交換できるZoom機能）が良かった」

「WHO講師によるグループのエンパワーメントとファシリテーションのスキルから多くのことを学んだ」

等

研修の改善点について

- ・参加者に国際色があると良いとの意見
⇒国を超えたGOARN研修の実施を検討
- ・グループワーク（ブレイクセッション）の際他の参加者と直接話せないのも少しストレスがあった、集中力を維持するのが大変だったとの意見
⇒より快適なオンライン研修の提供の仕方を検討

どのように研修内容を今後の自分の活動に活かしたいか？
(自由記述回答の主要意見)

- 実際の派遣への準備
- 現場でIPC活動を実施すること
- 国際的なチームで働くこと
- チームや現地の人々との良いの関係を構築すること
- 現地の人々との調整
- 文化的感受性を鍛えること
- 物事に対する柔軟性を保つこと
- ネットワーキング
- 自分が開催するIPC研修
- ウェルビーイングの実践
- 複数の問題に対して優先順位をつけること

等

GOARN IPC virtual training 2020 Post-course; Competency test 結果

GOARN 研究班

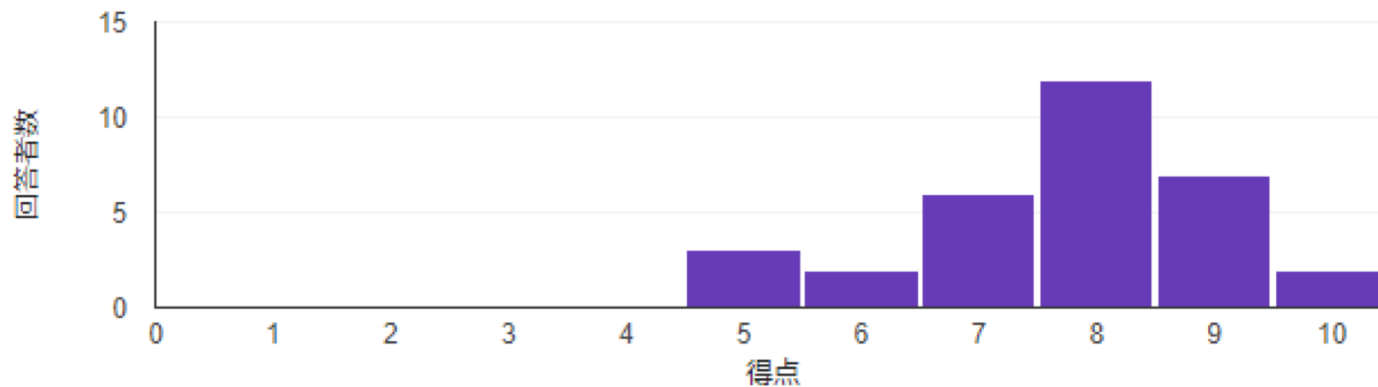
Competency test 得点結果 (回答者32名)

平均
7.75/10 ポイント

中央値
8/10 ポイント

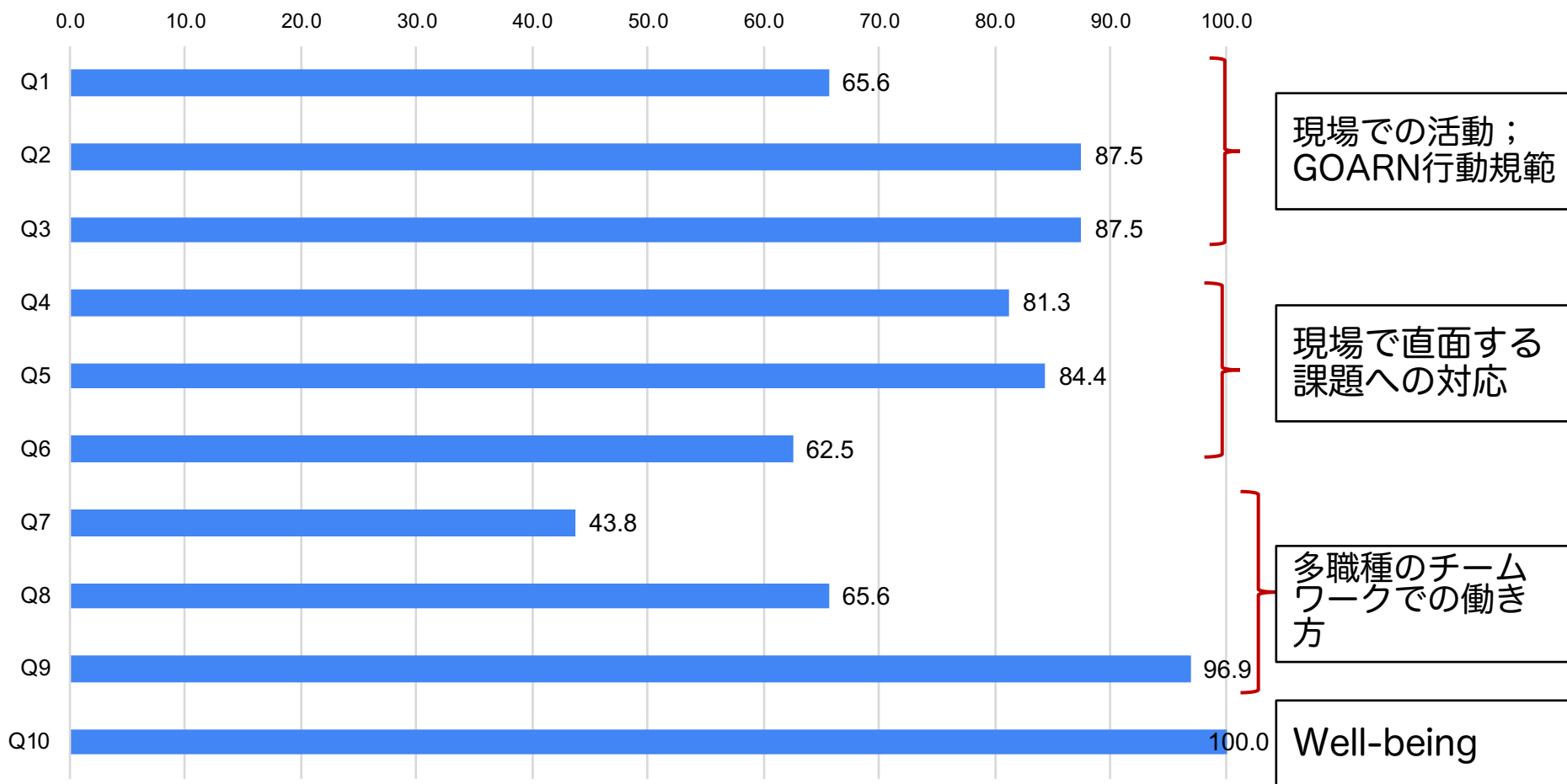
範囲
5~10 ポイント

合計点の分布



- ・5ポイント 3人
- ・6ポイント 2人
- ・7ポイント 6人
- ・8ポイント 12人
- ・9ポイント 7人
- ・10ポイント 1人

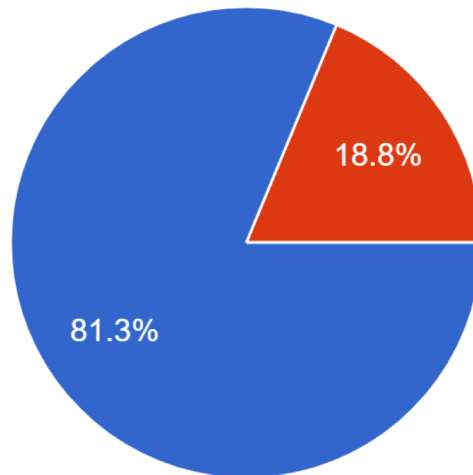
各質問とテーマ別の正解割合



過去のGOARN研修参加有無による得点比較

1. Is this your first attendance to GOARN Tier 1.5 training?

32 件の回答



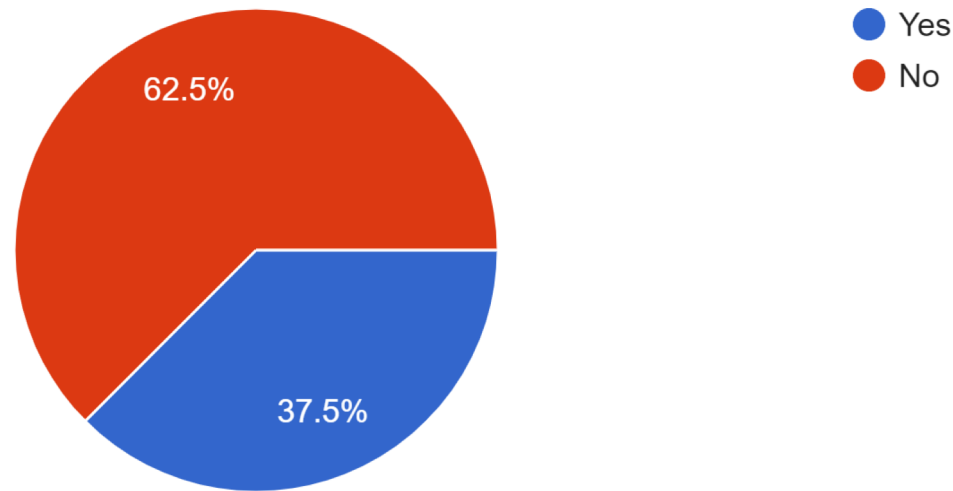
- Yes
- No, I participated in the training held in December 2019 in Tokyo too.
- No, I participated in the training held in December 2019 in Tokyo, and more.

- 2回目 平均8.17ポイント(5名)
- 初回 平均7.65ポイント(27名)

WHOによる国外ミッションの経験有無による得点比較

3. About your international field experience with WHO abroad

32 件の回答



● 経験あり

平均8.50ポイント (12名)

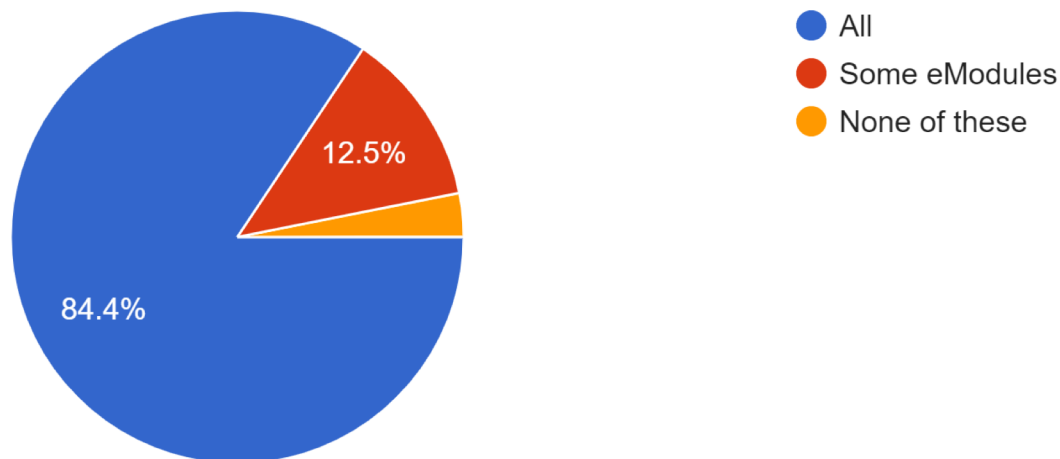
● 経験なし

平均7.30ポイント (20名)

研修前受講必須の6つのe-Moduleの達成度による得点比較

1) Completion level of 6 short eModules in Part 1

32 件の回答



- 全て終わらせた 平均7.65ポイント (27名)
- いくつか終わらせた 平均7.25ポイント (4名)
- やってない 8ポイント (1名)

II. 厚生労働科学研究費補助金
(地球規模保健課題解決推進のための行政施策に関する研究事業)
令和2年度 分担研究報告書

国外の健康危機発生時に対応できる人材に必要なコンピテンシーの分析及び
人材を増強するための研修プログラムの開発のための研究

2. 日本の専門家の GOARN 派遣を促進するための体制整備に関する研究

研究代表者

国立国際医療研究センター 国際感染症センター 大曲 貴夫

研究分担者

国立大学法人長崎大学 熱帯医学研究所 森田 公一

国立大学法人東北大学 大学院医学系研究科微生物学分野 押谷 仁

国立大学法人長崎大学 熱帯医学研究所 山本 太郎

日本赤十字社和歌山医療センター 感染症内科 古宮 伸洋

国立感染症研究所 ウイルス第一部 西條 政幸

国立感染症研究所 感染症疫学センター 山岸 拓也

研究協力者

国立国際医療研究センター 国際感染症センター 李 祥任

国立国際医療研究センター 国際感染症センター 石金 正裕

国立国際医療研究センター 国際感染症センター 野本 英俊

国立国際医療研究センター 国際感染症センター 久保田 瞳

国立国際医療研究センター 国際医療協力局 法月 正太郎

国立大学法人東北大学 大学院医学系研究科微生物学分野 神垣 太郎

日本赤十字社和歌山医療センター 感染症内科 小林 謙一郎

国立感染症研究所 ウイルス第一部 前木 孝洋

研究要旨

国際的に脅威となる感染症に対して、国際社会の枠組みによる緊急対応は非常に重要性を増している。我が国はこれまでに資金拠出面で大きく貢献している一方で、GOARN (Global Outbreak Alert and Response Network)に派遣された専門家は非常に限られている。そこで本研究では、日本の専門家のGOARN派遣を促進するための支援体制の整備について検討することを目的とした。今年度は、GOARN JAPAN ロスターの構築と専門家への派遣促進支援、海外派遣経験者の帰国報告会の開催、GOARN普及活動を多角的に実施した。

本研究活動を通じ、GOARN派遣に関心を示す日本の専門家のGOARN研修の参加から、その後のロスター登録、派遣の申請支援、採用された専門家の派遣先からの帰国後に至り、専門家の派遣促進のための好循環を作りあげることができたと考える。また、普及活動により、専門家個人だけでなく組織レベルにもGOARNの理解を促進するための情報を発信した。

さらに、GOARNの運営中核メンバーやWHO WPRO地域の加盟国のGOARNパートナー機関とも、情報交換やネットワーク強化を強化することができた。グローバルな最新動向を捉えつつ、国内の専門家の派遣を取り巻く環境を考慮しながら、引き続き日本の専門家のGOARN派遣を促進するための支援体制の整備を進める必要がある。

A. 研究目的

国際的に脅威となる感染症に対して、国際社会の枠組みによる緊急対応は非常に重要性を増している。世界保健機関(World Health Organization; WHO)に発足した健康危機管理対応プログラム(World Health Emergencies Programme; WHE)の下、アウトブレイクが発生した国へ専門家を派遣し技術支援を行うGOARN(Global Outbreak Alert and Response Network)もその一つである。我が国はこれまでにWHEへ資金拠出面で大きく貢献している一方で、GOARNに派遣された専門家は非常に限られている。今後一人でも多くの日本の専門家が国際チームのGOARNに参加し、現地で日本の顔の見える人的・技術的貢献も推進することが期待されている。

そこで本研究では、日本の専門家のGOARN派遣を促進するための支援体制の整備について検討することを目的とする。

B. 研究方法

(1)GOARN JAPAN ロスターの構築と専門家への派遣促進支援

2019年度に本研究班は、同年に開催したGOARN Tier1.5研修の日本人受講者を対象に、GOARNで将来的に活躍できる候補者の人材プール“GOARN Japan ロスター”の構築に着手した。GOARN Japan ロスターは、本研究班事務局の国立国際医療研究センター(NCGM)の国際感染症センターが運営管理し、登録者へGOARN派遣要請情報、今後のGOARNの派遣に役立つ情報や関連するセミナーなどの情報をタイムリーに共有することを目的としたプラットフォームである。本年度は、本ロスター登録者を拡大するため、2020年10月に実施したオンラインGOARN Tier1.5研修の受講者のうち希望する者を本ロスターに登録する計画を立てた。本ロスター登録者の中から、GOARN派遣要請やWHO Regional Office for Western Pacific (以下、WHO WPRO)の専門家募集に対して応募する意思の連絡を受けた際には、本研究班事務局が申請の支援を行う体制の構築を図った。

(2) 海外派遣経験者の帰国報告会

GOARN JAPAN ロスター登録者への継続的な情報共有の一環として、GOARN や WHO を通じて海外へ派遣された専門家の帰国後に、派遣のプロセスや現地での取り組み、直面した課題及び教訓を共有いただくことを目的にした「海外派遣者帰国報告会」を開催した。参加対象は、本ロスター登録者以外に、国際的な感染症のアウトブレイク対応に関心のある人である。帰国報告会の案内の送付先は、有力な派遣候補者が所属すると考えられる、国立感染症研究所の実地疫学専門家養成コース(FETP)、厚生労働省の危機管理専門家(IDES)、国際協力機構(JICA)が事務局を担当する国際緊急援助隊(JDR)、NCGM(センター病院、国際医療協力局、グローバルヘルス人材教育センター)等のネットワーク等、とした。また、国際保健及び感染症分野の各種メーリングリスト経由でも適宜案内を投稿する方法とした。

(3) GOARN普及活動

昨年度に実施したGOARN派遣を促進するための因子を明らかにする研究の結果より、GOARN派遣の候補者となる専門家の多くは、日本国内の医療機関や研究機関、行政機関に所属しているため、国内での業務とどのように折り合いをつけてGOARN派遣に参加するかが、今後の検討課題となっていた。つまり、日本人専門家のGOARN派遣促進のためには、専門家個人だけでなく、所属する組織からの理解を得られるための対応の必要性が考えられた。よって、今年度は日本国内の専門家個人だけでなく、より多くの組織へGOARNへの認知を広めGOARN派遣の理解が促進されるよう、GOARNの普及活動を実施した。具体的には、各種関連学会での演題発表及びシンポジウムの企画、学術誌への論文の投稿、GOARN普及リーフレットの作成やNCGMのホームページによる情報掲載を通じて、日本からのGOARN派遣の意義及び本研究班の取り組みを広く発信した。

C. 結果

(1) GOARN JAPAN ロスターの構築と専門家への派遣促進支援

2020年10月に開催したオンラインGOARN Tier1.5研修の参加者は32名おり、そのうち外国人留学生を除くと30名が日本人であった。この日本人受講者をGOARN Japan ロスター候補とし、GOARN Japan ロスターへの登録を任意で募った。その結果、30名全員から回答が得られた。その内訳は、GOARN JAPAN ロスター登録の希望については、29名が「あり」で、1名は「なし」であった。29名のうち3名は2019年度GOARN研修参加者であり、既にGOARN Japan ロスターへ登録されていたため、26名が今年度新たにGOARN Japan ロスターへ登録された。本年度は、加えて、2019年のGOARN研修参加者で2019年度にロスター登録をしていなかったが今年度に希望した1名、GOARN研修の参加者ではないが今年GOARNへ派遣された専門家でロスター登録をした1名が登録された。こうしてGOARN Japan ロスター登録者数は、2019年度のGOARN Tier1.5研修参加者の中で同年に登録した34名に加えて、2021年3月時点で合計62名となった。

なお、今年の研修参加者の中でロスター登録を希望した専門家の所属先内訳は、GOARN パートナー機関である者が29名(46.8%)、GOARN パートナー機関ではない者が33名(53.2%)であった。

こうしたGOARN Japanロスターの登録者向けにGOARN派遣に役立つ情報提供として、GOARNの専門家派遣要請(5回)や、WHO地域事務局からの派遣募集(4回)、専門家の能力強化に役立つ各種セミナー等に関する情報をEメールにて共有した。(詳細は、別紙を参照)

さらに、ロスター登録者へ共有したGOARNやWHOによる専門家派遣要請情報に対し7名が応募の関心を示し、以下のように申請の支援や調整を行った。なお、7名中、4名は所属先がGOARNパートナー機関ではない専門家であった。

具体的には、2020年8月のWHO WPROから出された新型コロナウイルス感染症(COVID-19)対策における臨床管理専門家の募集については、2019年のGOARN研修参加を機にGOARN JAPAN ロスターへ登録した小林謙一郎医師が応募し、派遣を実現させた。同

医師がパプアニューギニアに派遣されている間、現地における活動情報を聞き取るためオンラインミーティングを開催し、帰国後は後述する帰国報告会にて経験を発表いただく講師として依頼し、了承を得た。2020年11月には、SEAROからのバングラデシュにおけるCOVID-19対策臨床管理専門家の募集について、2020年GOARN研修に参加し、本ロスターに登録した1名より、応募する旨連絡を受けたが、派遣には至らなかった。

2021年2月送付のWPROから出されたCOVID-19対策臨床管理専門家の派遣募集については、2020年GOARN研修に参加し、本ロスターに登録した1名より、応募する旨連絡を受けた。GOARN研究班事務局が、申請者へ応募のためのCV及びカバーレターの書き方等について適宜助言を行ったが、派遣には至らなかった。

2021年2月にSEAROから出された東ティモールにおけるCOVID-19対策へのGOARN要請については、2020年GOARN研修に参加し、本ロスターに登録した1名より、応募する旨連絡を受けた。厚生労働省結核感染症課をフォーカルポイントとして申請登録をしたが、COVID-19下における国際線本数の制限(月に1本程度の運行)により職場で調整した日程に嵌らず、申請を断念した。

2021年3月に出された麻疹対策へのGOARN要請については、2020年GOARN研修に参加し本ロスターに登録した3名より、応募する旨、連絡を受けた。2名は、今回のフォーカルポイントを、長崎大学熱帯医学研究所(1名)、国立国際医療研究センター(1名)、として申請を行ったが、GOARNパートナー機関の所属ではなかった1名は厚生労働省結核感染症課枠で検討中である。(2021年3月31日時点)

(2) 海外派遣経験者の帰国報告会

以下の派遣帰国報告会を行った。

・GOARN派遣帰国報告会第1回オンラインセミナー

報告会日時：令和2年6月11日

報告会参加者数：約50名

スピーカー：法月 正太郎医師

国立国際医療研究センター(NCGM) 国際医療協力局

派遣先：WHOフィリピン国事務所 (COVID-19対策、IPC)

・GOARN派遣帰国報告会第2回オンラインセミナー

報告会日時：令和2年7月8日

報告会参加者数：57名

スピーカー：神垣 太郎先生

東北大学大学院医学系研究科微生物学分野

派遣先：WHO WPRO (COVID-19対策、疫学)

・第3回オンラインセミナーWHO WPRO派遣帰国報告会

報告会日時：令和3年1月12日

報告会参加者：48名

スピーカー：小林 謙一郎医師

和歌山医療センター感染症内科

派遣先：パプアニューギニア (COVID-19対策、臨床管理専門家)

各報告会の開催後に参加者に対しオンラインでアンケートを実施した。第1回報告会では30名よりアンケートの回答を得た。そのうち「本セミナーでどの情報が参考になったか？」の質問については、「GOARNの活動の実際」11名(53.3%)、「GOARN派遣における教訓・課題」8名(26.7%)の順に回答が多かった。自由回答には、現場でのコミュニケーションや、活動報告の重要性など知れて良かった、日本国内の医療現場にも活かせる内容が参考になった等の意見が寄せられた。

第2回報告会では33名よりアンケートの回答を得た。「本セミナーでどの情報が参考になったか？」については「GOARNの活動の実際」18名(54.5%)、「GOARN派遣における教訓・課題」6名(18.2%)「GOARN派遣における教訓・課題」6名(18.2%)の順に回答が多かった。自由回答には、COVID-19流行による不測の事態での経験を聞くことができ参考になった、GOARN研修受講を希望したい等の意見が寄せられた。

第3回報告会では30名よりアンケートの回答を得た。「本セミナーでどの情報が参考になったか？」については、「海外ミッション派遣の実際」12名(41.4%)、現地(パプアニューギニア)のCOVID-19の状況8名

(27.6%)、「海外ミッション派遣における教訓・課題」6名(20.7%)の順に回答が多かった。自由回答には、現地で「本当に必要な支援とは何か」について考える機会となった、報告会を受けてGOARN派遣への意欲が高まった等の意見が寄せられた。

(3)GOARN 普及活動

今年度は、GOARN と本研究班の取り組みを普及するために、学会発表(2 題)及び論文投稿(1 本)、学会におけるシンポジムの企画・開催等を行った。(詳細は本報告書の「研究発表」項を参照。)

10 月に開催された日本感染症学会東日本地方会学術集会におけるシンポジウムでは、GOARN に派遣される日本人専門家の数が限られていることを課題としたうえで、国際感染症対策に関わることを望む者には、厚生労働省をはじめとした政府機関に勤務し国際保健の分野で経験を積む、WHO などの国際機関に勤務してキャリアを積むなどの様々な国際的なキャリアパスが開かれている旨を紹介し、派遣を促進するための体制整備に寄与する本研究班活動について発表した。司会及び発表者は、本研究班の参加組織の研究者が合同で務めた。

さらに、本研究班の取り組みの結果、当初は想像もしなかった次のインパクトも得られた。

まず、COVID-19 拡大の影響を受けつつも、当研究班が2年連続でGOARN研修を実現し成功を修めたことがGOARNやWHO WPROより称賛され、本研究班研究協力者の李祥任(NCGM国際感染症センター)がWHO WPRO主催のGOARN Partners Regional Meetingにスピーカーとして招待を受けた。本会にはWPRO地域の加盟国のGOARNパートナー機関関係者を中心に100名以上が参加した。さらに李は、本会のPanel Discussionのパネリストとしても招待を受け、GOARN Steering committee議長や、WHOにあるGOARNの運営支援チームの取りまとめ担当者らと共に、GOARNを円滑に展開するためのregionalizationの強化の必要性について、議論を行った。

更に、WHO GOARNから本研究班研究メンバーの2名へ、GOARNにおける能力強化プログラムの広報となるCapacity Building and Training Programme Advocacy Videosへの以下の出演依頼を受け、収録に協力した。

・Video1: GOARNの能力開発および研修プログラムに対する参加者からの評価

出演者: NCGM国際医療協力局 法月 正太郎先生(2019年のGOARN研修への参加を経て2020年にCOVID-19対策でWHOフィリピン国事務所へ派遣)

・Video2: GOARNの能力開発および研修プログラムに対する組織からの評価

出演者: NCGM国際感染症センター 李 祥任研究員

加えて、GOARN普及リーフレット「世界の国際感染症対策における日本からの技術支援の促進に向けて」を出版し、全国の指定感染症病院等約600施設に配布した(別添1参照)。内容として、GOARNに関する知識のない読者に分かりやすくGOARNに関する基礎知識から、GOARN派遣体験談、GOARNに応募するには等、GOARN派遣促進につながる情報を包括的に含めた。具体的なGOARN派遣のイメージが読者へ伝わるよう、初年度に当研究班分担研究報告書に寄稿して頂いた中島一敏教授(大東文化大学)と本研究班研究分担者の古宮伸洋医師(日本赤十字社和歌山医療センター)の手記より適当箇所を抜粋し、過去の派遣経験者からのGOARNでの経験や今後の派遣希望者を激励するメッセージとして掲載した。

D. 考察

今年度開催したGOARN研修の参加者に対する案内等を通じ、今年度は新たに28名がGOARN Japanロスターに登録され、2021年3月時点で本ロスター数は合計62名と拡大した。

さらに、こうしたGOARN Japanロスターの登録者向けにGOARN派遣に役立つ情報提供として、GOARNやWHO地域事務局からの派遣募集や、専門家の能力強化に役立つ各種セミナー等に関する情報を共有したことで、GOARNやWHOによる専門家派遣要請情報に対し7名が応募し、2021年4月までに1名が

WHO WPROから出されたCOVID-19対策における臨床管理専門家としてブアニューギニアに派遣された。

こうした取り組みにより、日本で開催するGOARN研修の参加者後にロスターに登録、ロスターのプラットフォームからタイムリーな派遣情報を得て応募、海外の国際感染症対策のために派遣、帰国後は帰国報告会で他のロスター登録者へタイムリーに経験や現地で実施されている対策の最新情報を共有、という専門家の派遣促進のための好循環を作りあげることができたと考える。

なお、今年の研修参加者の中でロスター登録を希望した専門家の所属先内訳は、GOARN パートナー機関ではない者の割合が半数を超えていた。よって、今後のこうした所属先の専門家がGOARNの要請に申請をする場合に直面する課題の整理や必要な支援のあり方を継続して検討する必要がある。

今年度は、さらにGOARN普及活動も展開した。日本では、GOARN派遣にある程度理解を有しているGOARNパートナー機関数は17機関であるが、全国の指定感染症機関数と比較すると決して多い数とはいえない、と考えられた。よって、今年度にGOARN普及活動を全国レベルで多角的に行ったことで、GOARNの派遣要請に対し関心を示す専門家の層を拓げるためや、所属先の組織からもGOARNの理解を得られるための支援環境作りを推進できたと考えられる。

こうした普及活動の継続と共に、今後は日本のGOARNパートナー機関の間でネットワーク強化を図ることにより、最新のGOARN情報や研究班の取り組みを紹介し、多くの機関からGOARNへの専門家派遣に対する関心をさらに高める取り組みも必要と考える。

さらに12月に開催されたWHO WPRO主催のGOARN Partners Regional Meetingでは、GOARNパートナー機関としての取り組みを代表する形で、本研究班から2年間のGOARN研修の発展と成果を発表する機会となり、日本のこうした取り組みは他国のGOARNパートナー機関から高い注目を集めた。また、

本会の冒頭で、葛西健 WHO WPRO 事務局長より、GOARN パートナー機関を代表する活動を行う本研修班に対する感謝のお言葉をいただいた。

また、パネルディスカッションで本研究班研究メンバーが登壇し、GOARN 研修による専門家の能力強化の機会や、GOARN 枠ではないがWHOの国事務所からの要請で感染症対策のために専門家として派遣される機会は、将来的にGOARN 枠で派遣される専門家の能力強化だけでなく円滑なGOARNの運営のためにも役立つことの意義を発表した。このメッセージを、WHO WPRO やGOARNの世界的中核メンバーへ届ける絶好の機会になったと考える。

さらに、このGOARN Partners Regional Meetingに参加したことで、オーストラリア政府がGOARNに派遣されるオーストラリアの専門家の派遣中の給与を含めた人件費に対する支援を通じて、国レベルでGOARNへの人材派遣を支援している情報も得られた。よって、日本の専門家のGOARN派遣を促進するための支援体制の整備のために、今後、こうした諸外国におけるGOARN派遣を促進する支援体制の情報をさらに収集し、分析する予定である。

E. 結論

本研究活動を通じ、GOARN派遣に関心を示す日本の専門家のGOARN研修の参加から、その後のロスター登録、派遣の申請支援、採用された専門家の派遣先からの帰国後に至り、専門家の派遣促進のための好循環を作りあげることができたと考える。

さらにこの2年間における当研究班の積極的な取り組みにより、GOARNの運営中核メンバーやWHO WPRO地域の加盟国のGOARNパートナー機関とも、情報交換やネットワークを強化することができた。引き続き、グローバルな最新動向を捉えつつ、国内の専門家の派遣を取り巻く環境を考慮しながら、引き続き日本の専門家のGOARN派遣を促進するための支援体制の整備を進める必要がある。

F. 健康危機情報

該当なし。

研究発表

1. 論文発表

Hidetoshi Nomoto, Masahiro Ishikane, Sangnim Lee, Nobuhiro Komiya, Takahiro Maeki, Tamano Matsui, Kouichi Morita, Hitoshi Oshitani, Masayuki Saijo, Takuya Yamagishi, Taro Yamamoto, and Norio Ohmagari. Facilitating the Deployment of Japanese Human Resources for Global Outbreaks of Emerging and Re-emerging Infectious diseases: A Cross-Sectional Study (投稿済み。査読対応中)

・国際感染症の発生時の日本によるWHOの国際的緊急技術支援ミッションへの人的貢献を促進するための体制整備に向けた一考察 (投稿準備中)

2. 学会発表

第69回日本感染症学会東日本地方会学術集会. シンポジウム「国際感染症対策における多様なキャリアパスと派遣を促進するための体制整備のあり方」2020年10月23日.

座長：大曲 貴夫、古宮 伸洋

発表者：石金正裕、井手 一彦、古宮 伸洋、山岸 拓也

李 祥任、法月 正太郎、神垣 太郎、太田 夢香、石金 正裕、大曲 貴夫. 国際感染症の発生時の日本によるWHOの国際的緊急技術支援ミッションへの人的貢献を促進するための体制整備に向けた一考察 -WHO GOARN と日本の JDR の特徴と派遣制度の比較-. グローバルヘルス合同大会 2020 大阪. 2020年11月1-3日.

野本 英俊、石金 正裕、李 祥任、大曲 貴夫. 日本からのGOARN派遣を促進する因子を明らかにするためのアンケート調査. グローバルヘルス合同大会2020大阪. 2020年11月1-3日.

GOARN Partners Regional Meeting. 4th December, 2020. (online)

(1) Invited speaker

Sangnim Lee. “Orientation to the International Outbreak Response with GOARN and WHO workshop on Infection Prevention and Control -Through collaboration between GOARN, WHO and Japan- “ in the session of GOARN partner activities.

(2) Invited speaker

Sangnim Lee. In the Panel Discussion “GOARN regionalization” .

H. 知的財産権の出願・登録状況 (予定を含む)

1. 特許取得

なし。

2. 実用新案登録

なし。

3. その他

なし。

GOARN Japan ロスターの登録者向けに提供した GOARN 派遣に役立つ情報一覧(2020 年度)

- ・2020 年 6 月送付：2020 年 6 月開催 GOARN 派遣帰国報告会第 1 回オンラインセミナーの案内（スピーカー：法月 正太郎医師 国立国際医療研究センター(NCGM) 国際医療協力局、派遣先：WHO フィリピン国事務所（COVID-19 対策、IPC））
 - ・2020 年 6 月送付：2020 年 7 月開催 GOARN 派遣帰国報告会第 2 回オンラインセミナー（スピーカー：神垣 太郎先生
- 東北大学大学院医学系研究科微生物学分野、派遣先：WHO WPRO（COVID-19 対策、疫学）
- ・2020 年 8 月送付：2020 年 10 月開催オンライン GOARN Tier1.5 研修の案内
 - ・2020 年 8 月送付：WHO 西太平洋地域事務所（以下、WPRO）からの COVID-19 対策臨床管理専門家の派遣募集の情報共有
 - ・2020 年 8 月送付：中国における COVID-19 対策への GOARN 派遣要請の情報共有
 - ・2020 年 9 月送付：2020 年 10 月開催「国際機関規範設定メカニズムワークショップ ～専門家として国際貢献する道～」の案内
 - ・2020 年 9 月送付：ギリシャにおける COVID-19 対策への GOARN 派遣要請の情報共有
 - ・2020 年 9 月送付：WHO 本部におけるインフルエンザ対策でのコンサルタント募集の情報共有
 - ・2020 年 10 月送付：10 月開催 WHO 主催「インフォデミック管理に関するオンライン研修」の案内
 - ・2020 年 11 月送付：11 月開催 Training Programs in Epidemiology and Public Health interventions Network (TEPHINET) 主催セミナー「How to Increase Your Chances of Being Selected for an International GOARN Response Mission」の案内
 - ・2020 年 11 月送付：WHO 東南アジア地域事務所（以下、SEARO）からのバングラデシュにおける COVID-19 対策臨床管理専門家の派遣募集の情報共有
 - ・2020 年 12 月送付：2021 年 1 月開催第 3 回オンラインセミナー WHO WPRO 派遣帰国報告会の案内（スピーカー：小林 謙一郎医師 和歌山医療センター感染症内科、派遣先：パプアニューギニア（COVID-19 対策、臨床管理専門家）
 - ・2021 年 2 月送付：WPRO からの COVID-19 対策臨床管理専門家の派遣募集の情報共有
 - ・2021 年 2 月送付：東ティモールにおける COVID-19 対策への GOARN 派遣要請の情報共有
 - ・2021 年 3 月送付：麻疹対策への GOARN 派遣要請の情報共有

(以上)



GOARNに応募するためには？

国際感染症のアウトブレイク対策のために、WHO加盟国からの技術支援要請を受け、WHO GOARN運営支援チームが各GOARNパートナー機関のフォーカルポイントへGOARN派遣要請の連絡を行います。この要請に対し、GOARNパートナー機関から条件が該当する専門家の技術支援を申し出る場合は、専門家の必要書類を揃えて申請します。

日本からGOARNへの専門家派遣を促進する取り組み

厚生労働科学研究費補助金 地球規模保健課題解決推進のための行政施策に関する研究事業「国外の健康危機発生時に対応できる人材に必要なコンピテンシーの分析及び人材を増強するための研修プログラムの開発のための研究」班は、2019年と2020年に、WHO GOARN、WHO西太平洋地域事務所（WPRO）と共催で、GOARNの理解を深めGOARNで活躍できる専門家の能力強化を目的としたGOARN Tier 1.5 Training Workshopを日本で開催しました。また、日本からGOARNへの専門家派遣を促進するために、2019年にGOARN研修受講者や国際感染症アウトブレイク対応の経験を有する専門家が登録できるGOARN日本ロスターを作りました。国立国際医療研究センター（NCGM）国際感染症センター（DCC）がその事務局として、ロスター登録者に対しGOARN 派遣要請に関する迅速な情報共有と申請者への側面支援、派遣に役立つ技術研修・セミナーや派遣者の帰国報告会などの情報提供を行っています。本ロスター登録に関心のある方は、下記の本事務局までお問い合わせください。また、GOARNパートナー機関の登録に関心のある組織からのご質問もあればご連絡ください。



厚生労働科学研究費補助金 地球規模保健課題解決推進のための行政施策に関する研究事業
「国外の健康危機発生時に対応できる人材に必要なコンピテンシーの分析及び人材を増強するための
研修プログラムの開発のための研究」

（研究代表者 国立国際医療研究センター（NCGM）国際感染症センター長 大曲 貴夫）

連絡先：GOARN研究班事務局 <goarntraining@hosp.ncgm.go.jp>

ホームページ：http://dcc.ncgm.go.jp/



世界の国際感染症対策における 日本からの技術支援の 促進に向けて

WHO GOARNとの連携

2021



なぜ国際感染症対策へ取り組む必要があるのか？

昨今の国際感染症の感染拡大防止に係る国際的な対応の教訓から、国際感染症に対する国際協力については、人道的支援にとどまらず、自国への波及を防止するものとして認識されています。日本政府は、国際協力も含めて感染症対策を担う人材育成の強化の必要性から、世界保健機関（WHO）との連携、緊急時に迅速に人材を派遣できる仕組みの構築、それらを支える人材育成の仕組みの整備等を重点的に強化すべき事項として挙げています*。そのため、GOARN（Global Outbreak Alert and Response Network）の迅速な技術サポートシステム強化への取組は非常に重要であり、さらにその需要は世界の新型コロナウイルス感染症（COVID-19）拡大からも高まっています。

*H28 国際的に脅威となる感染症対策の強化に関する基本方針
出典：首相官邸ホームページ（https://www.kantei.go.jp/jp/singi/kokusai_kansen/）

GOARNの目的

GOARNは、WHOとパートナー機関により2000年に設立された、COVID-19、エボラウイルス病等の国際感染症の危機発生時に感染症対策の専門家を実地へ迅速に派遣し技術支援を行う国際的なネットワークです。GOARNは、人々の健康を脅かすような病気の発生、食品の安全性、化学毒素、人獣共通感染症や自然災害などの緊急事態が発生しているWHO加盟国に技術支援を行っています。

世界のパートナー機関

GOARNは現在、世界の270を超える技術機関やネットワークで構成されています。この20年間で160以上の技術支援を行い、世界90か国以上を支援するために3300人を超える専門家を派遣しました。公衆衛生上の危機発生時の対策への直接的支援に留まらず、GOARNパートナー機関は、そのネットワークを活用した情報交換や研修による対応能力の強化、研究・技術開発を推進しています。また、国際感染症のアウトブレイクへの対策に貢献できる機関であれば、GOARNパートナー機関に参加できます。2021年3月時点で日本国内にはパートナー機関が17あり、その数の増加が期待されています。

日本の主な派遣実績

- 2000年 エボラウイルス病（ウガンダ）7名
- 2001年 エボラウイルス病（ウガンダ）1名
- 2003年 SARS（香港）2名
- 2004年 鳥インフルエンザ（ベトナム、インドネシア）3名
- 2005年 津波被害（インド）1名
デング熱（東ティモール）2名
- 2014年 MERS（アラブ首長国連邦）1名
エボラウイルス病（リベリア、シエラレオネ）10名
- 2015年 エボラウイルス病（リベリア、シエラレオネ）7名
- 2017年 ジフテリア（バングラディシュ）1名
- 2018年 エボラウイルス病（コンゴ民主共和国）1名
ラッサ熱（ナイジェリア）1名
ジフテリア（バングラディシュ）1名
- 2019年 ラッサ熱（ナイジェリア）1名
コレラ（イエメン）1名
- 2020年 COVID-19（フィリピン、WPRO）2名



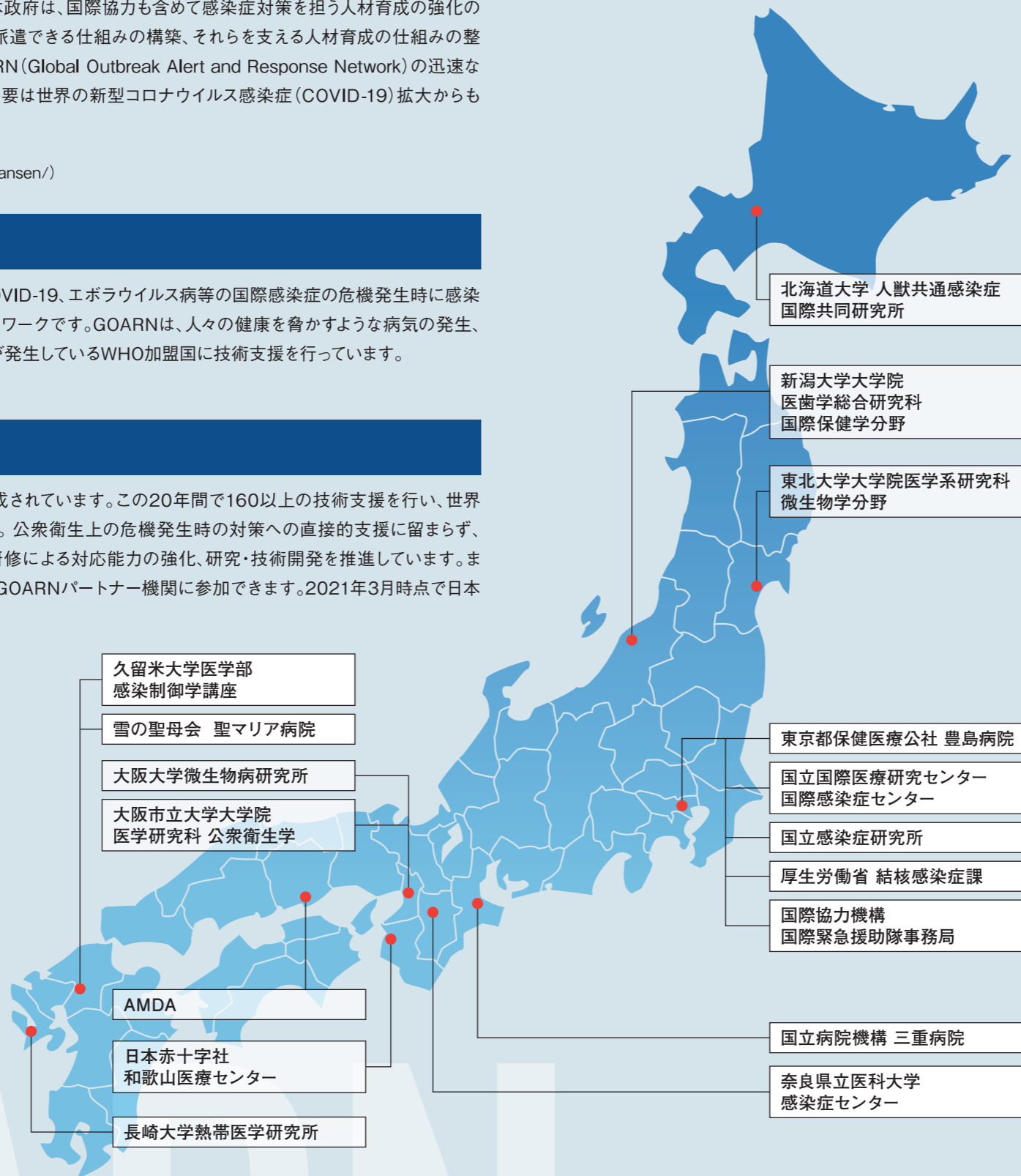
派遣者

東京検疫所 検疫衛生課
井手 一彦先生

2018年バングラディシュ
疾病対策に関わる
研究所での活動にて

日本のGOARNパートナー機関

引用：GOARN Focal Pointデータベース，2021年3月時点



GOARN関連ページのリンク紹介

GOARN knowledge platform
<https://extranet.who.int/goarn/>



国立国際医療研究センター国際感染症センター
http://dcc.ncgm.go.jp/activity/Global_Health/



過去の派遣経験者より

派遣者

大東文化大学教授
中島 一敏先生



派遣期間

2003年4月8日～2003年4月18日

香港のWHO SARSの疫学チームで 流行のピークにあたる2003年4月中旬に活動

GOARN派遣に至った経緯：国立感染症研究所感染症情報センター（IDSC）で2年間の実地疫学研修（FETP）でのトレーニングを修了し、大学病院に所属していたところ、WHOがSARS対応支援のための実地疫学者を探しているとの連絡をIDSCから受けて応募しました。

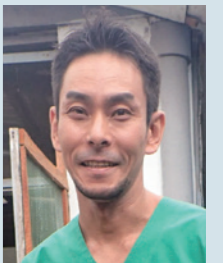
現地での活動：潜伏期間、感染経路、リスク因子等アウトブレイクの調査に従事。調査内容を香港衛生部と共有。週2～3回は、WHO対策本部、ベトナム・シンガポール等の現地疫学調査チームと電話会議で情報交換を行いました。

Message

アウトブレイクの本質は現地に行かなければ分かりません。論文にならない多くのことを、現地で実感として感じることができます。

派遣者

日本赤十字社和歌山医療センター
古宮 伸洋先生



派遣期間

2014年8月25日～2014年9月18日

リベリアでのエボラ出血熱 アウトブレイク対策へのGOARN派遣

GOARN派遣に至った経緯：国際赤十字社としての国外活動の実績がある中で、当時のGOARNからの派遣募集に対して応募しました。

現地での活動：WHOの関わるエボラ治療施設の感染管理とスタッフ教育を中心に行いました。病院内での医療活動、住民啓発活動、安全な埋葬に関する手法指導など、多岐に渡って活動しました。

Message

専門家として感染症の大きな事案に貢献することが出来る貴重な機会ですので、ぜひ多くの方が活動に興味を持ち、参加されることをお勧めします。

別紙4

研究成果の刊行に関する一覧表レイアウト

書籍

著者氏名	論文タイトル名	書籍全体の編集者名	書 籍 名	出版社名	出版地	出版年	ページ

雑誌

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
Fujita M, Umeda T, Fujita N, Nishioka T, Iwamoto A, Ohmagari N, Ishikane M, Akashi H, Kurodo Norihiro.	Japanese WHO Collaborating Centres (WHO CCs) fight against COVID-19.	Glob Health Med.	2021 Apr 30;3(2)	115-118.	2021
Hidetoshi Nomoto, Masahiro Ishikane, Saese Ongnim Lee, Nosuburo Komiyama, Takahiro Maeki, Tamano Matsui, Kouichi Morita, Hitoshi Oshitanai, Masayuki Saijo, Takuya Yamagishi, Taro Yamamoto, and Norio Ohmagari.	Facilitating the Deployment of Japanese Human Resources for Global Outbreaks of Emerging and Re-emerging Infectious diseases	DA Cross-Sectional Study			査読対応中 (投稿済み)

令和3年 4月 12日

厚生労働大臣
(国立医薬品食品衛生研究所長) 殿
(国立保健医療科学院長) 一

機関名 国立研究開発法人
国立国際医療研究センター

所属研究機関長 職名 理事長

氏名 國土 典宏



次の職員の令和2年度厚生労働科学研究費の調査研究における、倫理審査状況及び利益相反等の管理については以下のとおりです。

1. 研究事業名 地球規模保健課題解決推進のための行政施策に関する研究事業
2. 研究課題名 国外の健康危機発生時に対応できる人材に必要なコンピテンシーの分析及び人材を増強するための研修プログラムの開発のための研究
3. 研究者名 (所属部署・職名) 国際感染症センター ・ センター長
(氏名・フリガナ) 大曲 貴夫 ・ オオマガリ ノリオ

4. 倫理審査の状況

	該当性の有無		左記で該当がある場合のみ記入 (※1)		
	有	無	審査済み	審査した機関	未審査 (※2)
ヒトゲノム・遺伝子解析研究に関する倫理指針	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>
遺伝子治療等臨床研究に関する指針	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>
人を対象とする医学系研究に関する倫理指針 (※3)	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	国立国際医療研究センター	<input type="checkbox"/>
厚生労働省の所管する実施機関における動物実験等の実施に関する基本指針	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>
その他、該当する倫理指針があれば記入すること (指針の名称:)	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>

(※1) 当該研究者が当該研究を実施するに当たり遵守すべき倫理指針に関する倫理委員会の審査が済んでいる場合は、「審査済み」にチェックし一部若しくは全部の審査が完了していない場合は、「未審査」にチェックすること。

その他 (特記事項)

(※2) 未審査に場合は、その理由を記載すること。

(※3) 廃止前の「疫学研究に関する倫理指針」や「臨床研究に関する倫理指針」に準拠する場合は、当該項目に記入すること。

5. 厚生労働分野の研究活動における不正行為への対応について

研究倫理教育の受講状況	受講 <input checked="" type="checkbox"/> 未受講 <input type="checkbox"/>
-------------	---

6. 利益相反の管理

当研究機関におけるCOIの管理に関する規定の策定	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> (無の場合はその理由:)
当研究機関におけるCOI委員会設置の有無	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> (無の場合は委託先機関:)
当研究に係るCOIについての報告・審査の有無	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> (無の場合はその理由:)
当研究に係るCOIについての指導・管理の有無	有 <input type="checkbox"/> 無 <input checked="" type="checkbox"/> (有の場合はその内容:)

令和3年5月10日

厚生労働大臣
(国立医薬品食品衛生研究所長) 殿
(国立保健医療科学院長)

機関名 国立大学法人長崎大学

所属研究機関長 職名 学長

氏名 河野 茂

次の職員の令和2年度厚生労働科学研究費の調査研究における、倫理審査状況及び利益相反等の管理については以下のとおりです。

1. 研究事業名 地球規模保健課題解決推進のための行政施策に関する研究事業
2. 研究課題名 国外の健康機器発生時に対応できる人材に必要なコンピテンシーの分析及び人材を増強するための研修プログラムの開発のための研究

3. 研究者名 (所属部署・職名) 熱帯医学研究所・教授
- (氏名・フリガナ) 森田 公一・モリタ コウイチ

4. 倫理審査の状況

	該当性の有無		左記で該当がある場合のみ記入 (※1)		
	有	無	審査済み	審査した機関	未審査 (※2)
ヒトゲノム・遺伝子解析研究に関する倫理指針	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>
遺伝子治療等臨床研究に関する指針	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>
人を対象とする医学系研究に関する倫理指針 (※3)	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>
厚生労働省の所管する実施機関における動物実験等の実施に関する基本指針	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>
その他、該当する倫理指針があれば記入すること (指針の名称:)	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>

(※1) 当該研究者が当該研究を実施するに当たり遵守すべき倫理指針に関する倫理委員会の審査が済んでいる場合は、「審査済み」にチェックし一部若しくは全部の審査が完了していない場合は、「未審査」にチェックすること。

その他 (特記事項)

(※2) 未審査に場合は、その理由を記載すること。

(※3) 廃止前の「疫学研究に関する倫理指針」や「臨床研究に関する倫理指針」に準拠する場合は、当該項目に記入すること。

5. 厚生労働分野の研究活動における不正行為への対応について

研究倫理教育の受講状況	受講 <input checked="" type="checkbox"/> 未受講 <input type="checkbox"/>
-------------	---

6. 利益相反の管理

当研究機関におけるCOIの管理に関する規定の策定	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> (無の場合はその理由:)
当研究機関におけるCOI委員会設置の有無	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> (無の場合は委託先機関:)
当研究に係るCOIについての報告・審査の有無	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> (無の場合はその理由:)
当研究に係るCOIについての指導・管理の有無	有 <input type="checkbox"/> 無 <input checked="" type="checkbox"/> (有の場合はその内容:)

(留意事項) ・該当する□にチェックを入れること。
・分担研究者の所属する機関の長も作成すること。

厚生労働大臣 殿

機関名 国立大学法人東北大学

所属研究機関長 職名 総長

氏名 大野 英男

次の職員の令和2年度厚生労働科学研究費の調査研究における、倫理審査状況及び利益相反等の管理については以下のとおりです。

- 研究事業名 地球規模保健課題解決推進のための行政施策に関する研究事業
- 研究課題名 国外の健康危機発生時に対応できる人材に必要なコンピテンシーの分析及び人材を増強するための研修プログラムの開発のための研究
- 研究者名 (所属部署・職名) 大学院医学系研究科・教授
(氏名・フリガナ) 押谷 仁・オシタニ ヒトシ

4. 倫理審査の状況

	該当性の有無		左記で該当がある場合のみ記入 (※1)		
	有	無	審査済み	審査した機関	未審査 (※2)
ヒトゲノム・遺伝子解析研究に関する倫理指針	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>
遺伝子治療等臨床研究に関する指針	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>
人を対象とする医学系研究に関する倫理指針 (※3)	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>
厚生労働省の所管する実施機関における動物実験等の実施に関する基本指針	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>
その他、該当する倫理指針があれば記入すること (指針の名称:)	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>

(※1) 当該研究者が当該研究を実施するに当たり遵守すべき倫理指針に関する倫理委員会の審査が済んでいる場合は、「審査済み」にチェックし一部若しくは全部の審査が完了していない場合は、「未審査」にチェックすること。

その他 (特記事項)

(※2) 未審査に場合は、その理由を記載すること。

(※3) 廃止前の「疫学研究に関する倫理指針」や「臨床研究に関する倫理指針」に準拠する場合は、当該項目に記入すること。

5. 厚生労働分野の研究活動における不正行為への対応について

研究倫理教育の受講状況	受講 <input checked="" type="checkbox"/> 未受講 <input type="checkbox"/>
-------------	---

6. 利益相反の管理

当研究機関におけるCOIの管理に関する規定の策定	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> (無の場合はその理由:)
当研究機関におけるCOI委員会設置の有無	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> (無の場合は委託先機関:)
当研究に係るCOIについての報告・審査の有無	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> (無の場合はその理由:)
当研究に係るCOIについての指導・管理の有無	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> (有の場合はその内容: 研究実施の際の留意点を示した)

(留意事項) ・該当する口にチェックを入れること。
・分担研究者の所属する機関の長も作成すること。

機関名 国立感染症研究所
 所属研究機関長 職名 所長
 氏名 脇田 隆字



次の職員の令和2年度厚生労働科学研究費の調査研究における、倫理審査状況及び利益相反等の管理については以下のとおりです。

1. 研究事業名 地球規模保健課題解決推進のための行政施策に関する研究事業
2. 研究課題名 国外の健康危機発生時に対応できる人材に必要なコンピテンシーの分析及び人材を増強するための研修プログラムの開発のための研究
3. 研究者名 (所属部・職名) ウイルス第一部・部長
 (氏名・フリガナ) 西條 政幸・サイジョウ マサユキ

4. 倫理審査の状況

	該当性の有無		左記で該当がある場合のみ記入 (※1)		
	有	無	審査済み	審査した機関	未審査 (※2)
ヒトゲノム・遺伝子解析研究に関する倫理指針	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>
遺伝子治療等臨床研究に関する指針	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>
人を対象とする医学系研究に関する倫理指針 (※3)	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>
厚生労働省の所管する実施機関における動物実験等の実施に関する基本指針	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>
その他、該当する倫理指針があれば記入すること (指針の名称：)	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>

(※1) 当該研究者が当該研究を実施するに当たり遵守すべき倫理指針に関する倫理委員会の審査が済んでいる場合は、「審査済み」にチェックし一部若しくは全部の審査が完了していない場合は、「未審査」にチェックすること。

その他 (特記事項)

(※2) 未審査に場合は、その理由を記載すること。

(※3) 廃止前の「疫学研究に関する倫理指針」や「臨床研究に関する倫理指針」に準拠する場合は、当該項目に記入すること。

5. 厚生労働分野の研究活動における不正行為への対応について

研究倫理教育の受講状況	受講 <input checked="" type="checkbox"/> 未受講 <input type="checkbox"/>
-------------	---

6. 利益相反の管理

当研究機関におけるCOIの管理に関する規定の策定	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> (無の場合はその理由：)
当研究機関におけるCOI委員会設置の有無	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> (無の場合は委託先機関：)
当研究に係るCOIについての報告・審査の有無	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> (無の場合はその理由：)
当研究に係るCOIについての指導・管理の有無	有 <input type="checkbox"/> 無 <input checked="" type="checkbox"/> (有の場合はその内容：)

(留意事項) ・該当する□にチェックを入れること。
 ・分担研究者の所属する機関の長も作成すること。

令和3年5月7日

厚生労働大臣
(国立医薬品食品衛生研究所長) 殿
(国立保健医療科学院長)

機関名 国立大学法人長崎大学

所属研究機関長 職名 学長

氏名 河野 茂

次の職員の令和2年度厚生労働科学研究費の調査研究における、倫理審査状況及び利益相反等の管理については以下のとおりです。

1. 研究事業名 地球規模保健課題解決推進のための行政施策に関する研究事業
2. 研究課題名 国外の健康機器発生時に対応できる人材に必要なコンピテンシーの分析及び人材を増強するための研修プログラムの開発のための研究

3. 研究者名 (所属部署・職名) 熱帯医学研究所・教授
(氏名・フリガナ) 山本 太郎・ヤマモト タロウ

4. 倫理審査の状況

	該当性の有無		左記で該当がある場合のみ記入 (※1)		
	有	無	審査済み	審査した機関	未審査 (※2)
ヒトゲノム・遺伝子解析研究に関する倫理指針	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>
遺伝子治療等臨床研究に関する指針	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>
人を対象とする医学系研究に関する倫理指針 (※3)	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>
厚生労働省の所管する実施機関における動物実験等の実施に関する基本指針	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>
その他、該当する倫理指針があれば記入すること (指針の名称:)	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>

(※1) 当該研究者が当該研究を実施するに当たり遵守すべき倫理指針に関する倫理委員会の審査が済んでいる場合は、「審査済み」にチェックし一部若しくは全部の審査が完了していない場合は、「未審査」にチェックすること。

その他 (特記事項)

(※2) 未審査に場合は、その理由を記載すること。

(※3) 廃止前の「疫学研究に関する倫理指針」や「臨床研究に関する倫理指針」に準拠する場合は、当該項目に記入すること。

5. 厚生労働分野の研究活動における不正行為への対応について

研究倫理教育の受講状況	受講 <input checked="" type="checkbox"/> 未受講 <input type="checkbox"/>
-------------	---

6. 利益相反の管理

当研究機関におけるCOIの管理に関する規定の策定	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> (無の場合はその理由:)
当研究機関におけるCOI委員会設置の有無	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> (無の場合は委託先機関:)
当研究に係るCOIについての報告・審査の有無	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> (無の場合はその理由:)
当研究に係るCOIについての指導・管理の有無	有 <input type="checkbox"/> 無 <input checked="" type="checkbox"/> (有の場合はその内容:)

(留意事項) ・該当する口をチェックを入れること。
・分担研究者の所属する機関の長も作成すること。

令和3年 5月 21日

厚生労働大臣
(国立医薬品食品衛生研究所長) 殿
(国立保健医療科学院長)

機関名 日本赤十字社和歌山医療センター

所属研究機関長 職名 院長

氏名 平岡 眞寛

次の職員の令和2年度厚生労働科学研究費の調査研究における、倫理審査状況及び利益相反等の管理については以下のとおりです。

- 研究事業名 地球規模保健課題解決推進のための行政施策に関する研究事業
- 研究課題名 国外の健康機器発生時に対応できる人材に必要なコンピテンシーの分析及び人材を増強するための研修プログラムの開発のための研究

- 研究者名 (所属部署・職名) 日本赤十字社和歌山医療センター・感染症内科部部长
(氏名・フリガナ) 古宮 伸洋 ・コミヤ ノブヒロ

4. 倫理審査の状況

	該当性の有無		左記で該当がある場合のみ記入 (※1)		
	有	無	審査済み	審査した機関	未審査 (※2)
ヒトゲノム・遺伝子解析研究に関する倫理指針	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>
遺伝子治療等臨床研究に関する指針	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>
人を対象とする医学系研究に関する倫理指針 (※3)	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>
厚生労働省の所管する実施機関における動物実験等の実施に関する基本指針	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>
その他、該当する倫理指針があれば記入すること (指針の名称:)	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>

(※1) 当該研究者が当該研究を実施するに当たり遵守すべき倫理指針に関する倫理委員会の審査が済んでいる場合は、「審査済み」にチェックし一部若しくは全部の審査が完了していない場合は、「未審査」にチェックすること。

その他 (特記事項)

(※2) 未審査に場合は、その理由を記載すること。

(※3) 廃止前の「疫学研究に関する倫理指針」や「臨床研究に関する倫理指針」に準拠する場合は、当該項目に記入すること。

5. 厚生労働分野の研究活動における不正行為への対応について

研究倫理教育の受講状況	受講 <input checked="" type="checkbox"/> 未受講 <input type="checkbox"/>
-------------	---

6. 利益相反の管理

当研究機関におけるCOIの管理に関する規定の策定	有 <input type="checkbox"/> 無 <input checked="" type="checkbox"/> (無の場合はその理由: COI委員会を委託しているため)
当研究機関におけるCOI委員会設置の有無	有 <input type="checkbox"/> 無 <input checked="" type="checkbox"/> (無の場合は委託先機関: 国立国際医療研究センター)
当研究に係るCOIについての報告・審査の有無	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> (無の場合はその理由:)
当研究に係るCOIについての指導・管理の有無	有 <input type="checkbox"/> 無 <input checked="" type="checkbox"/> (有の場合はその内容:)

(留意事項) ・該当する□にチェックを入れること。
・分担研究者の所属する機関の長も作成すること。

令和3年4月13日

機関名 国立感染症研究所

所属研究機関長 職 名 所長

氏 名 脇田 隆字



次の職員の令和2年度厚生労働科学研究費の調査研究における、倫理審査状況及び利益相反等の管理については以下のとおりです。

1. 研究事業名 R2 厚生労働科学研究 地球規模保健課題解決推進のための行政施策に関する研究事業
2. 研究課題名 国外の健康危機発生時に対応できる人材に必要なコンピテンシーの分析及び人材を増強するための研修プログラムの開発のための研究
3. 研究者名 (所属部・職名) 薬剤耐性研究センター 第四室長
(氏名・フリガナ) 山岸 拓也・ヤマギシ タクヤ

4. 倫理審査の状況

	該当性の有無		左記で該当がある場合のみ記入 (※1)		
	有	無	審査済み	審査した機関	未審査 (※2)
ヒトゲノム・遺伝子解析研究に関する倫理指針	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>
遺伝子治療等臨床研究に関する指針	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>
人を対象とする医学系研究に関する倫理指針 (※3)	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>
厚生労働省の所管する実施機関における動物実験等の実施に関する基本指針	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>
その他、該当する倫理指針があれば記入すること (指針の名称:)	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>

(※1) 当該研究者が当該研究を実施するに当たり遵守すべき倫理指針に関する倫理委員会の審査が済んでいる場合は、「審査済み」にチェックし一部若しくは全部の審査が完了していない場合は、「未審査」にチェックすること。

その他 (特記事項)

(※2) 未審査に場合は、その理由を記載すること。

(※3) 廃止前の「疫学研究に関する倫理指針」や「臨床研究に関する倫理指針」に準拠する場合は、当該項目に記入すること。

5. 厚生労働分野の研究活動における不正行為への対応について

研究倫理教育の受講状況	受講 <input checked="" type="checkbox"/> 未受講 <input type="checkbox"/>
-------------	---

6. 利益相反の管理

当研究機関におけるCOIの管理に関する規定の策定	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> (無の場合はその理由:)
当研究機関におけるCOI委員会設置の有無	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> (無の場合は委託先機関:)
当研究に係るCOIについての報告・審査の有無	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> (無の場合はその理由:)
当研究に係るCOIについての指導・管理の有無	有 <input type="checkbox"/> 無 <input checked="" type="checkbox"/> (有の場合はその内容:)

(留意事項) ・該当する□にチェックを入れること。
・分担研究者の所属する機関の長も作成すること。